

仮面ライダーはなぜ人々に共感されるのか

目的

本論文は“特撮ヒーロー番組¹”『仮面ライダー²』（1971ー）が、なぜ人々に共感されるのかを、その“物語”によって示されている“文化的価値観”に求めることである。これによって『仮面ライダー』を思想として再検討し、現代の共同体における個人の心理的問題を解決する一助としたい。

ここでの“文化的価値観”とは、人々に長く語り継がれてきたことを根拠とした、いわゆる伝統的な考え方や思想のことである。これはあらゆる民族や共同体が持ち、“物語”によって伝えられている。“物語”に感動した人は、自身がなぜ感動したのかをより鮮明に表現する為に言葉を尽くし、編集し、語り継いでいく。これが何世代にも渡って繰り返されることで、“物語”は多くの人々が共感し、感動するものとして洗練される。そうして洗練された“物語”は人々の行動の指標として機能し、明確な“文化的価値観”となる。

同時に“物語”は、共感する人々に帰属感と安定感を与える。人は、自身と同じように共感する他者と、強い結びつきを感じる。同じ“物語”に共感するもの同士を、同じ“文化価値観”に帰属する成員の一人として捉える。これによって、人は、この“物語による結びつき”によって自身を共同体の一員として感じ取ることができるのだ。また“物語による繋がり”は“精神的な孤独”からの“避難所”となる。ここでの“精神的な孤独”とは“自分があらゆる人々から孤立し、誰とも結びついていないと感ずること”である。“精神的な孤独”は、人に精神的な死をもたらし、それから避難する為に人は他者との結びつきを求める。

さて、この“物語”の“精神的孤独からの逃避場所”となる機能は、もともと“物語による結びつき”を得ていた時点で、無条件に発生するものだった。しかし現代において、“物語”はある理由から“精神的孤独からの避難場所”にできなくなった。これが現代の共同体における個人の心理的問題の要因となっている。

この共同体における個人の心理的問題に関して、端的に言えば次のようになる。“物語”が“精神的孤独からの避難所”として機能しなくなったことで、個人は懸命に“避難所”を得ようとする。この時、個人がはじめに結びつこうとするのが、共同体や組織である。しかし無条件に“物語による繋がり”を感じていた頃と異なり、現代の共同体において安定感を得るには“対価”が必要となってしまった。

例えば、企業において個人は“収益を上げる”という“対価”を払う必要がある。もし払えなければ、その人は企業によって必要のない者として退職させられる。しかし“対価”を払って一時的に“避難所”を得ても、時間が経過すればまた“対価”が必要となる。す

ると個人は不安から避難し続ける為に、共同体に“対価”を払い続けなければならない。しかも“いつ自分が対価を払えなくなるのか分からない”という強い不安を抱えており、この慢性的な不安は強く個人を圧迫する。この不安から自身を守る為に、個人は共同体や組織に“対価”を払うことに執着するようになる。“対価”を払い続けられれば、とりあえずは“強い不安”から逃れることができる。つまり、“不安からの避難場所”を確保し続けられるということに繋がる。しかし同時にこの熱狂や献身は、“孤独からの避難所”を得ることを最優先する。献身的に尽くすことで、肉体的精神的に追い詰められることもあるだろう。あるいは熱狂的に“避難所”の確保しようとする余りに、一般から見て非人道的な行為とも結びつくこともある。結果、献身的に活動した個人は、肉体的精神的な限界を超えて自滅してしまう。あるいは後者のように“熱狂的に”行われた結果、ナチスに代表されるような全体主義国家の非人道的な行為と結びついてしまう。これ現代の共同体における個人の心理的問題である。そして、この問題に対して対処できるような“物語”を作ろうとしたのが『仮面ライダー』であった。

『仮面ライダー』は、シリーズ作品やビデオ、ゲーム、二次創作など他分野に広がって、2011 年現在まで語り継がれている。『月光仮面』(1958) から始まった“特撮ヒーロー”の系譜として考えれば、戦後 50 年以上続いてきた思想を洗練したものだ。同様に続いてきた“特撮ヒーロー番組”として、『ウルトラマン』(1968) がある。実は初期の“ウルトラマン・シリーズ”は、前述の“現代の共同体における個人の心理的問題”を物語の中で提示し、“物語”による解決は不可能であると表現したものだ。しかし『仮面ライダー』は同様の問題に対し、新しい“物語”のあり方を示すことで、“現代の共同体における個人の心理的問題”にも対応できる“文化的価値観”のあり方を示そうとした。この影響は多大なものである。しかし一般的に“子供向けテレビ番組は学術的な研究対象にならない”という風潮から、それが思想的な研究対象とされることはなかった。

本論では『仮面ライダー』を、“特撮ヒーロー”の系譜による“文化的価値観”の発展段階で浮上した“現代の共同体における個人の心理的問題”に対し、解決方法を生み出したものとして考える。第一章では、“物語”が語り継がれることで文化的価値観を形成しているということについて具体的な解説を、神話の成り立ちの過程や物語の構造論から解説する。第二章では、近代において“物語”が社会的な変化によって正常に機能せず、現代まで続く社会的な危機の要因となっていることを、フロムの『自由からの逃走』の観点から分析する。第三章では、“特撮ヒーロー”が物語ることで伝達していった文化的価値観の具体的な内容を村瀬の「三界論」を使って説明し、第二章との関連から“現代の共同体における個人の心理的問題”の詳細に関して、『ウルトラマン』の内容と併せて分析する。第四章では、この“問題点”に対し、『仮面ライダー』がどのような解決方法を物語っているのかを分析する。

この“現代の共同体における個人の心理的問題”は、現代の社会問題と密接に関わっている。この為、『仮面ライダー』の物語る内容を再評価し、解決策を知ることで、現代の共同体における個人の心理的問題、あるいはそれが原因として起こる社会的問題を解決する

一助となれば幸いである。

第一章 “物語による繋がり”

この章では、“物語”が語り継がれることで“文化的価値観”を形成するということを明らかにし、それが人々にどのような作用をもたらすのかを明らかにする。これによって、『仮面ライダー』を“物語”という観点から分析する上での足がかりとしたい。まず物語とはどのように生まれ、どのような機能を持っているのかということに注目しよう。最も明快に言い表したものだと考えられるのは、河合隼雄の次のような発言である。

天空に輝く太陽をみたとき、どのような民族であれ、その不思議さに心打たれたことであろう。そして、その重要さを感じたはずである。人間の特徴は、そのような体験を、自分なりに『納得』のゆくこととして言語によって表現し、それを他人と共有しようとすることである。それによって、人と人とのつながりができてくる。太陽を太陽という言葉によって共通に認識しているだけでは不十分なのである。言葉が組み合わさって、ひとつの物語を生み、物語という一種の体系を共有するのである。そのようにして『世界観』ができあがってくるが、同じ価値観を共有する集団もそれに伴って生じてくる。

かくして、ある部族はそれがひとつの部族としてのまとまりをもつためには、それに特有の物語を共有することが必要となったのである³。

“物語”は“人が自身の感動を言葉として具体的に伝える為に生み出された手段”である。そして“物語”に共感した者同士には繋がりが生まれ、同じ価値観を共有した集団の一員として感じることになる。これを“物語による繋がり”と呼ぶとしよう。

この“物語による繋がり”の存在はアメリカの作家ディーン・R・クーンツ⁴や映画研究者ニール・D・ヒックス⁵といった、現代の“物語”創作者たちにも実感されている。まずはクーンツの記述を見てみよう。彼はなぜ人が小説を書くのか、そしてなぜ小説が多くの人々に読まれるのかについて次のように書いている。

しかし、わたしは金のためにものを書くのではない。それは誰にしたって同じだろう。わたしは楽しみを与えるために書いている。痛みと恐怖と残酷な行為でいっぱいこの世界に数時間の逃避と数分間のよろこびや忘却を提供できるとすれば、すばらしいことではないだろうか。(中略)わたしは死ぬことが怖いから書く。もしかしたら、可能性はほんの少しだが、わたしの作品のどれかが私の死後も生き延びるかもしれないのだから。そうすれば、死をくじくことにもなる。

わたしの考え、感情、希望、夢を伝える為に私は書く。ひとりぼっちの怯えた人々すべてに手を差し伸べて、心の底ではわたしたちは一人ひとり皆同じであることを知らしめることも、作家の役目なのだ。無条件で互いに愛し合うべきだということではなく、例外なく誰にも行為を持てなどいうつもりもない。つまるところ、まわりには退屈な人、間抜けなやつ、まったくの悪党などがあるものなの

だ。が、みなひとりぼっちでおびえているのにかわりはない。わたしたちは共通の運命の下にいるにすぎない。

（中略）われわれは全て孤独で恐怖に駆られているのだ。たとえ男の中の男というような人物にしても、また幸運にも結婚して愛し合っている人々にしても、心の奥底で、宇宙の虚無を無意識に感じるとき、恐怖に駆られるのである。ふだん、われわれはこの恐怖を自分自身にもかくしている。全宇宙における自分の存在を問い詰めてゆくと、広大な浜辺の砂粒よりも小さく、力ないものに思えて、ただもう耐えられなく、自滅的になってしまうものだ。（中略）わたしたちが物語を読むのは、読むことで皆が一体になれるからであり、また神（あるいは生化学的な偶然）がわたしたちに与えた短い人生だけでなく、もっと多くの人生を味わうことが出来るからである⁶

人は“一人ぼっちであること”に不安を感じている。この“孤独による不安”は耐えがたく、それによって生じる“無力感”によって自滅的になってしまう。それから逃避するために、人は“物語による繋がり”を求める。このことは河合の記述と矛盾しない。また、河合は「人には自慢話をしたり、失敗談を語ったりしつつ、自分が孤独ではなく他の人々とのつながっていることを確認し、明日の仕事に向かうエネルギーを補給するのである⁷」と“物語することで自身の生きる気力を回復させる”という発言をしており、このクーンツの発言との関連性が感じられる。またニックスも“物語による繋がり”に関して、次のように記述している。

「人間はストーリーを語る生き物だ。世界における自分たちの位置を把握し、これまでの努力や行動をストーリーにして語り継いできた。ストーリーに納得するということは、文化がそういったストーリーを認めているということだ。（中略）真理だと認められたストーリーは神話となり、それを頼りに私たちは生きていく。そして神話に触れるたびに、人間は自分の文化や社会が共有する価値観を思い出す。神話を守る為に死んでいった祖先もいる。人間は神話を繰り返し語ることによって、社会の中で密接に結びついているのだ。神話は単なる娯楽ではない。神話には、私たちの負うべき倫理観や道徳、代々受け継がれた価値観の為に死をいとわない人々の姿が描かれているのである⁸

ここでも“物語による繋がり”は人々を帰属する共同体と結びつける作用を持っている。同時に“語り継がれていくこと”が“物語”を“神話”に昇華させる。“神話”は人に倫理観や道徳など“人の行動の指標となるもの”を示し、人の行動に強い影響を与える。ここから考えられる“文化的価値観”は次のようなものだと考えられる。

“物語による繋がり”によって結びついた共同体がある。ここの成員たちは、すでにある多くの“物語による繋がり”によって形作られた“文化的価値観”によって繋がっている。要するに“文化的価値観”は、神話化した“物語”の集合体なのである。

一方で、その成員たちは日常の中でそれぞれ“自身の物語”を語っている。これは自分の体験を基にした、自身の目から見た範囲の“物語”である。成員は帰属している物語の“文化的価値観”に多大な影響を受けている為、彼の行動を方向付けているのも既存の“文化的価値観”であることには変わらない。しかし彼の語る“自身の物語”には自分自身の体験に応じた感動を彼自身が解釈したという意味で独自のものである。関連したこととして、クーンツは小説を書く上で作家の思い入れが大事であると書いている箇所がある。

ものを書くということは、技術であると同時に芸術であり、それは芸術家の側に『思い入れ』、すなわち心の深い関わり合いを必要とするのだ。『思い入れ』というのはつまり、作家が自分自身のかかわっていることがら、心から関心を持っている材料、気に入っているストーリーや登場人物について書くべきだということだ。ストーリーのアイディアは、そのほとんどが新聞記事、ノンフィクション、他の作家の小説、友人がふと口にしたことばといった外部の情報源から得られるといってよい。そしてこれこそがプロットを生む唯一のものであることは確かである。しかしそこから先は作家自身の内部で発酵させなければならない。プロットの起承転結はすべて、作家独自の個性によって、そのものの見方を通して、つまり作家の性格や興味を反映させて組み立てられるべきなのだ⁹」

“プロット”とは、辞書的な意味では「小説・脚本の筋。筋道。構想¹⁰」である。これは、外部の内容からプロットを生む機会を得ることができるが、プロットを組み立てるのは作者自身の、独自の個性によるものであるということだ。反対から言えば、その作家の個性から出るもの以外で小説を書いても多数に受け入れられるものではないことを示している。

この“独自の物語”はその成員を通して、別の人々に伝えられる。この時、これが多くの人々に共感されたとすると、これはその成員だけのものではなく、多くの人間が共感する“新しい文化的価値観”となる。これは語る人を変えながら、繰り返し語り継がれることで明確な形となり、“既存”のものと同様か、それ以上に共感されることで“既存の文化的価値観”の一部となる。

つまり、“文化的価値観”は“全体像はすでに出来上がっているが、新しいものが次々と生まれながら淘汰と吟味が繰り返され、既存のものが入れ替わっていくという意味では変動的なもの”というものとして理解することができる。しかしこのモデルに即して“文化的価値観”を考えるとすれば、この一部として認められる“物語”にはどのような条件があるのか知ること、より具体的な“文化的価値観”の像が見えてくるはずである。このことについても、クーンツやニックスの考えを足がかりに考察しよう。

語り継がれる”物語”の条件

クーンツは、小説が多くの人々に読まれる為の条件を8つの要素に求めている。次の文章はそれに対する具体的な記述である。

(中略) 一般的に平均的な読者は、小説に以下八つの要素を求めていると言っていいでしょう。

- (1) しっかりとしたプロット
- (2) 見せ場が多いこと。
- (3) ヒーローとヒロイン、あるいはその両方が登場すること
- (4) 変化と想像力に富み、しかも説得力のある性格描写
- (5) 明確で自然な登場人物の動き
- (6) 綿密な背景描写
- (7) わかりやすい文章
- (8) 多少のリリズムと強烈な印象的イメージ豊富に盛り込んだ文体

(中略) プロットこそが小説の骨組であり、かたちのないものを組み立てていくに、しっかりと支えてくれる大黒柱なのです。プロットがしっかりしていれば、作品が安定するのはもちろん、作品のテーマを展開する上で、盛り上げたりふくらみを持たせたりすることも容易となります。性格描写より確固たるものになります。欠陥や不自然さのかけらもない、あらゆる点でじゅうぶん練り上げたプロットを組み立てることこそ、作家に課せられた最も骨の折れる、しかも避けることの出来ない仕事だといえます。これこそ、自己修練と、職人氣質と技量とをためす最高の試練だからです。

ここでも多くの人々に受け入れられる“物語”には“プロット”が必要であるとしている。ではクーンツが、プロットを具体的にどのように把握しているのか、彼が「古典的なプロットのパターン」として紹介したものから分析するとしよう。「パターン」ということからこれは“細部は違うけれども多くのプロットは次のような形式を取っている”とされる内容を示していることになる。具体的な記述を見ていこう。

成功した小説家の大多数が、同じストーリー・パターンを採用している。私はこのパターンを四段階に整理してみた。いささか単純化しすぎたきらいはあるが、本質的にはまちがっていないと思う。

- (1) 作家は今まさに恐ろしい困難に遭遇しようとしている主人公を紹介する。
- (2) 主人公はその困難を乗り越えようと努力するが、更に深みにはまる一方である。
- (3) 主人公が穴から這い上がろうとすると、色々と厄介なことが持ち上がる。自体はどんどん悪化していき、ついに考えつかないほどの困難に巻き込まれ、最悪の事態になる。多くの場合このトラブルは、主人公が問題を解決しようとあがくうちに犯した失敗や判断のあやまりがもたらしたものだ。失敗やあやまった判断は、主人公の個性を形成している欠点や美点の相互作用から生じる。
- (4) 恐ろしい体験と耐えがたい状況によって、深く傷つき、変貌を遂げた主人公は、自分自身について、あるいは人間がつねに置かれている状況について、何かを学び取る。彼はなすべき行動を実行に移す。それは成功することもあれば、失

敗に終わることもある。しかし成功する方が多い。というのも読者は、ハッピー・エンドを好む傾向があるからだ。

このことから、“プロット”とは“主人公が物語の中でどのような状況におかれ、行動し、結末を迎えるのかというものを示したもの”だと分かる。これと関連して、ニックスは映画の構造を誘因、期待、満足という三要素に分けて説明している。

（誘因）最初に脚本家は、観客の注意を引き付ける。我々は主人公を確立して、その登場人物に1つの問題があることを提示する。この問題は、明確にそれとわかる目的に到達することで解決されなければならない。観客が、その登場人物に一人の登場人物として興味を持つのが理想的である。しかしながら、そういった興味だけで、観客を間違いなく引き付けるのは、まれである。彼らの実際の注意は、登場人物ではなく、その登場人物が落ち込む困難な事態の方に向けられる。第一幕の段階で、観客の面々が自らに「その登場人物が、この困難からどのように脱出するのか見てみたい」と思う必要がある。

（期待）中盤の第二幕では、脚本家はストーリーのテンションを挙げて、もっともっと面白いことが起こるだろうと言う観客の期待を高めていく。しかしながら、これらの面白いことは、単なるバラバラのエピソードやギャグではない。それらは、ドラマが描こうとしている重要な変化の成功あるいは失敗に欠くことのできないつながりを持っている。それらはストーリーの文脈の中で我々にとって面白いのである。なぜならば、それらは、ドラマが書こうとしている重要な変化の成功あるいは失敗に欠くことができないつながりを持っている。それらはストーリーの文脈の中で我々にとって面白いのである。なぜならば、われわれは登場人物に成功してもらいたいのだが、そうするためには、登場人物は何か困難な障害を克服しなければならないだろうということが、主人公はドラマの葛藤が原因で、外的な敵対者と自分自身の内的な恐怖の両方に直面しなければならないのだ。

（満足）主人公は内的な障害を克服し、第一幕で確立された外的問題を解決し、価値ある目的に達成すると、観客は第三幕に満足する。こうして登場人物は、第二幕を通じて作り出された緊張を緩め、観客を劇場から、自分たちは完全なストーリー、全体の統一を見た満足して送り出す。彼らは劇場を出るときに、幸福かもしれないし悲しいかもしれない、意気揚々としているかもしれないし憤慨しているかもしれない、笑っているかもしれないし泣いているかもしれない——しかし彼らは、ストーリーが完全に終わっていて、結末が不完全ではなく、そしてほんの二時間という中で世界が本当に意味をなしていたから、満足しているのだ。

ここで注目するのは、ニックスの「満足」の箇所にある「完全なストーリー、全体の統一を見た」という記述である。これは後の「ストーリーが完全に終わっていて、結末が不完全ではなく、そしてほんの二時間という中で世界が本当に意味をなしていた」という表

現と同じものであろう。言い方を変えるならば、人々を多くひきつける作品ほど“完全な物語”であることになる。これに関し、ニックスは「ドラマ」と関連させて解説している。まずは「ドラマ」に関しての具体的な記述を見てみよう。

人類は数千年にわたってストーリーを語ってきている。われわれは数え切れないほどに焚き火を囲んで座り、部族の冒険談が、言葉の魔術で文化的な期待や神話的記録へと紡がれていくのを聞いてきているのだ。そして我々の初期の娯楽文化の発展のどこかで、ドラマという形式の、より魅力的なストーリーに対する好みを発展させた。しかし、アリストテレスとシェイクスピアがドラマの形式を改良して、今日我々が知っている喜劇と悲劇に組織立てられるはるか以前の、最も初期のドラマの形式は、おそらくスポーツ競技会、すなわち、共通の目的——勝利の栄光——のために、互いに争いあう両者の儀式化された闘いであつたろう。
(中略)

しかしながら、格闘をしている善良な奴と邪悪な奴がいると想像してごらん下さい。個々の競技者は、それぞれその価値のシステムを代表している。一方のシステムは善良と呼ばれている。なぜなら、観客の我々がその価値を共有しているからである。そして一方のシステムは邪悪と呼ばれている。なぜなら、その規則や行いは我々が賛同しないもので、我々の規則や行いのシステムとは共存できないからである。もし、その格闘家たちが我々の代理で闘っているのであれば、すなわち、もし我々がその争いの結果に影響を受けるのであれば、我々の生活はその結果により取り返しのつかない変化を受けることになるだろう。もし邪悪な奴が勝ったら、我々の生活は悪いほうに変えられるだろう。もし善良な奴が勝てば、我々の生活は豊かなものとなるだろう。こういった状況においては、闘いの結果から生じる変化に、はるかに力を注ぐことになる。我々の生活における何かが問題となっているのだ。こうすると、ドラマを持つことになる。

ドラマは葛藤である。それは、誰かが他の誰かと対立することである。それでもそれは、単なる対立以上のものなのだ。なぜなら、ドラマは関わりのある者の生活に重要な変化をもたらす——登場人物たちと彼らを取り巻く社会の双方を変える——葛藤だからである。

つまり「ドラマ」とは“物語”が語り継がれていくうちに発展した“物語の形式”である。「システム」としているが、後に“規則や行いの基準”となるというように読み取れるので、今まで語ってきた“文化的価値観”と同様のものだと考えられる。つまり、自身が帰属している“文化的価値観”を“善”、相容れないような別の“文化的価値観”を“悪”とした場合、我々の生活を豊かにする“善”が否定されないよう、“善”を代表する人間が、“悪”を代表する人間を倒すことを願うことで、人々はよりそのドラマに注目を注ぐということである。ニックスは「ストーリーが完全に終わる」とことに関連して、次のような記述をしている。

しかしドラマは、これが起こってそれからあれが起こってそして別の何かが起こってといった、ただ出来事を並べただけのものではない。ドラマは、これが起こりそのためにあれが起こるといった、ストーリーを語るものだ。ドラマは原因と結果の構成を見せて、我々に人生の意味を作り出す拠りどころを与えてくれる。

ドラマは人生ではない。人生は平凡である。(中略) 日常生活の出来事の大部分は、明瞭で満足できる解決のない事件の集まりである。(中略)

しかしながらドラマは、カプセルに包まれた人生、本質部分に凝縮され絶頂の状態とされた人生である。それは出来事が直線的に物語になるように配列されている。誰かが他の誰かと対立——葛藤——し、連なっている個々の出来事が、意味深い人生の変化の成功あるいは失敗に、直接影響している。

つまり、“ストーリーが完全に終わる”というのは“そのストーリーの中で展開された事柄の全てが直接的な因果関係に結ばれており、その全てが納得のいく形となって終了する”ということである。これによってその“物語”は“ドラマ”を通し、矛盾のない因果関係に応じて勧善懲悪の物語を展開し結末を迎える。このことで、その“勧善懲悪”が確かな意味を持ったものとして人々に伝わることになる。

またクーンツも、小説には“善と悪の対決を描く”という“ドラマ”的な構成が最も求められていると考えているようだ。なぜなら彼は小説の中で最も大切なものを“善”を代表し、悪役と対決する“ヒーロー”に求めているからである。具体的な記述を見ていこう。

ここで、ちょっと手紙を離れて、ヒーローよりも悪人の方が書きやすい理由をお話しよう。基本的には、次の三つの理由があげられる。

(1) 悪人の行動パターンには、無限の可能性があり、どんなことでもできるのにひきかえ、理想的なヒーローのほうはといえば、読者の尊敬と同情を一身に受けるべく行動しなければならず、おのずとその行動も限られてくる。

(2) 悪人的要素はどんな人の中にも存在している。その悪に惹かれる衝動を読者のかわりに実現してくれるわけだから、書く側はもちろん読む側もすかさずする。(中略) 大衆は十中八九、ヒーローの肩を持ちたがるものであるが、ときとして、悪人の味方をする事で欲求不満のはけ口を見出す。

(3) 悲しいことに、この世の中には善より悪の方がはんらんしており、しかも目につきやすい。だから、悪人の方が書きやすいのである。夜のテレビニュースは四分の三が、殺人、強姦、虚言、詐欺、窃盗、背信、偏見、無知、虚言で占められ、人間の醜悪な面に人は慣れっこになってしまっているのだ。

真正正銘のヒーローを書くことに負担を感じる作家もいるし、純文学界ではヒーローを名作の必要条件とは考えないことが主流になっているけれども、わたしはヒーローこそが、いかなる名作にも不可欠な要素だと信じている。小説の第一の目的は、思想、感情、希望、夢といったものを伝えることだとすでに述べたが、人間のなかの正義をたたえ、悪を呪うと言ったこともまた小説の目的ではあるまいか。

といっても、わたしは、小説が啓蒙的でなければならないとか、宗教的な教義を辛抱する必要があるとか言っているわけではない。だが芸術に人の心がないとしたら、いったい何の役に立つというのか。希望を与え、わたしたちの精神の高揚を招くものではないとしたら、芸術に何の力があるというのか。人生をよりよく楽しく耐えやすいものにしてくれる力がなければ、芸術に何の価値があるか。この問いにわたし自ら答えよう。芸術が今述べたような力を持たないなら、どんなにすばらしいものであれ存在価値はないと¹¹。

“読者の尊敬と同情を一身に受けるような行動をする”ということは、読者が自身の帰属する“文化的価値観”と照らし合わせた時に、それと強く結びつくような行動を行っているということである。つまり、ヒーローは“文化的価値観に応じた行動を取る”という意味でニックスのいう“善”を代表する人物と同様のものと捉えていいだろう。ニックスもまた、映画の中でアクション・アドベンチャーというジャンル¹²が主人公の活躍を通して、善を尊び、悪を懲らす道徳劇として機能していると述べている。

アクション・アドベンチャーは、道徳観の高さを表現したドラマである。だから主人公には高い道徳観があり、また敵対者も同じくらい強烈な意志と異なる価値観を持っている。そして主人公は、敵対者から自分の社会を守るために闘う。これこそ真理の暴かれる瞬間であり、観客の理想とするような偉大で、並外れた人物同士の、善と悪の一騎打ちの時なのである¹³。

この記述から、ニックスもまた主人公を通して“善”を表現していることが分かる。また彼は、主人公の“善”が悪役との戦いの中で強く打ち出されていることを強調する。

戦いの目的——ドラマは葛藤である。主人公に敵対する者がいなければ、観客に期待は生まれない。つまり外部からの力、主人公よりも卑劣で力も戦略も長けた敵対者が必要なのだ。(中略)

本音の告白——敵対者は主人公に比べて力もあり、準備も整っている。だから勝負は、敵対者が圧倒的に有利なのだ。主人公は様々な戦略を立てて準備するが、うまくいかない。そして最後には自分自身だけが取り残される。この最悪の状況になって初めて、主人公は内に秘めていた恐怖心・不信感・不誠実さなどに直面することになる。アクション・アドベンチャーの主人公は、うぶなロマンチストではなく、恐怖心に真っ向から立ち向かい、言葉ではなく行動で意志を表す人物なのだ¹⁴。

この「本音の告白」はクーンツが“プロット・パターン”の(4)と強い関連性がある。クーンツは「恐ろしい困難」と書いているが、これは“悪役”との対立によってもたらされるものも含まれていると考えていいだろう。また、主人公の“善”は行動によって示されるべきだとも書いている¹⁵。よって、ヒーローを通して伝えられる“善”とは“悪”との戦いで浮き彫りとされるものということになる。ではその葛藤を通して伝えられる“善”

とは何かを、主人公にとっての重要な要素と関連させて見ることにしよう。具体的な記述は次の通りである。

(1) 高潔さ

(中略) また、主要な登場人物たちが、性的な面で高潔さを保つべきと主張しているわけでもなければ、酒やタバコをたしなむことや悪態をつくの禁じているわけではない。登場人物たちがこういうことに関して自由に振舞っても、なお高潔な人物であることは可能なのである。つまり、わたしがここで取り上げようとしているのは、殺人、暴行、金銭欲、窃盗、背信行為など、道徳的側面からいってかなりの重みをもつことがらについてであって、これらに関しては、主人公たちは、男女を問わず善悪の区別を明確にしている必要があるのだ。たとえ、逆境にあって動揺することがあったとしても、主人公の場合はつねに善と正義の側についていなければならない。できることなら、災難に見舞われたときであっても、それから逃れるために、法、倫理、道徳などを犯さないことが望ましい。(中略) ときには筋の関係上、主人公が生き延びる為に同義に反するような行為をせざるを得ない絶体絶命のピンチもある。(中略) が、その場合でも、主人公がそれを当然のことと見なすのは絶対にまずい¹⁶。

(2) 有能さ

(中略) 平均的な読者が、能なしで、過酷な運命にただただ泣いている主人公を哀れに思ったり、共感を覚えたりすることはまずないだろう。いやしくも主人公たる者は、逆境に抗して立ち上がり、聡明なやり方で、それと解決する必要がある。そして、正しく問題解決の糸口をつかみ、聡明な、少なくとも良識のある方法で、新たに生じるよりも困難な状況に対応していかなければならないのである¹⁷。

(3) 勇気

読者は億病な主人公に対しても、共感を覚えないものだ。問題から逃げ出し、自分の行動のもたらす結末から目をそむけようとする人間の話に、食指が動かないのは当然である。

ひとくちに勇気と言っても、実際には多種多様である。アリスティア・マクリーンの『ナヴァロンの要塞』の主人公たちが、警戒厳重なドイツの要塞を急襲したさいに示した勇気。エリック・シーガルの『ラブ・ストーリィ』で、ジェニーが癌で死に直面したときに見せた、涙なしでは読み進みえない悲痛極まる勇気。エイヴリー・コーマンの『クレイマー・クレイマー』に描かれた、子どものために自分の夢を多少犠牲にしても、長年抱いていた人生の目的を再検討し、それを修正する父親の真の勇気。このように主人公が勇気を示せば、間違いなく読者は主人公を賛美し、彼に声援を送りたくなるに違いない¹⁸。

(4) 好感

主人公が高潔な人物で、有能かつ勇氣にあふれていても、彼が鼻持ちのならない気取った男だったり、自画自賛型の道徳家づらをしている人物だと、やはり読者の共感を得にくいものだ。

したがって、主人公は謙虚であるべきなのだが、それも度がすぎでは逆効果である。ユーモアのセンスをもち、しかもそれは、主人公自身にも向けられている必要がある。また親切で思いやりにあふれ、周囲の人々にも心を配る人物が望ましいが、といって敏感すぎて、つねに傷ついている空想的な理想主義者であっても、これもまた都合が悪い。というのは、読者は大風呂敷やこそ泥同様に、聖人君主にもさして共感を示さないからである¹⁹。

(5) 不完全さ

ジャンル小説では、作家はジェームズ・ボンドばりの完全無欠の主人公を作り出して、ごまかすことができる。しかし一般小説の場合には、ボンド型の主人公は普通受け入れられず、ごく身近で生活しているような、もっと現実的で、血肉を備えた人物でなければならない。現実の隣人たちが欠点だらけの人間であるように、小説の主人公たちも不完全な人物として描かれるべきである²⁰。

これらから分かることは、多少の個体差はあれど、ヒーローは、“文化的価値観”の中でも重要なものは尊重する姿勢を保ち続けることに変わりはないということである。そして、これは敵対者がどんなに強大で自分よりも優れた力を持っていたとしても、破ることは出来ない。しかしそれを遵守しながら“勇敢”に行動することで、それらの行動が全て結びつき、戦力の差があっても強大な“悪”を倒すような成果を生む。これが矛盾なく完成された“ストーリー”ということになる。これが語り継がれる“物語”の条件である。

第二章 “物語による繋がり”の危機

この章では、“物語による繋がり”が“切り離される”危険性に触れたいと思う。これによって現代社会における重要な問題点を浮き彫りにし、後の分析にも生かすためである。

前章の始めに、河合は“物語による繋がり”によって共通の“文化価値観”が出来て、それに伴った集団ができたと話した。しかし河合は、現代の社会において、共同体における“物語による繋がり”に危機が訪れていると言う。まず確認の意味を込めて、“神話”についての河合の具体的な記述を見よう。

日本神話を例にとって言えば、それが『古事記』や『日本書紀』として書き留められた頃においては、日本が他の国に対して、ひとつの独立した国として存在することを明らかにする、あるいは、当時の朝廷の基礎づけをする、という意味が大きかったと思われる。

神話は、その国の一員であるという帰属意識を生み、結び付ける力を持っている。これ

は今までの記述の通りだ。しかし近代以降、“科学”が発展したことによって、この共同体を結びつける“神話”が喪失していったというのである。

近代科学においては、観察者（研究者）は研究しようとする現象を自分から切り離して、客観的に観察して、そこに因果的な法則を見出そうとする。したがって、そこから見出された法則は、その個人とは関係のない普遍性を持つ。（中略）“科学の知”のもつ普遍性の為に、それは誰でも利用できるものとなった。かくして、人間はこのような“科学の知”を基にしてテクノロジーを発展せしめ、二十世紀の百年の間に、昔には及ばなかった便利で快適な生活を享受できるようになった。しかし、その代償として、“科学の知”が過ぎつぎと“神話の知”を破壊し、その喪失に伴う問題が多発するようになった²¹。

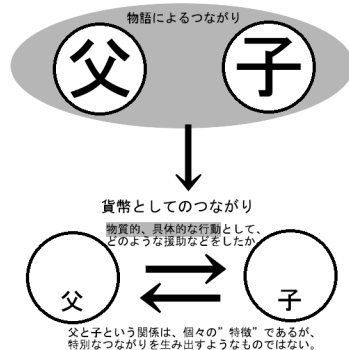
（中略）
”神話の知”の喪失は、現代における”関係性喪失の病”として顕れている。（中略）表面的に見る限り何の問題もない家に居ても、思春期の感受性をそなえた少女にとって、“居場所”ではないと感じさせるもの、それは家族としての真の”関係性”の喪失なのである。近代科学と結びついたテクノロジーの急激な発展と共に、人間は何か”良い方法”を知ることにより、ものごとを自分の望むままに”操作”できると思いすぎたのではなかろうか。このような態度は、人間が人間に対することにまで拡大され、“良い育児法”によって自分を良い子——つまり、自分の望む通りの子ども——にすることができるなどと思ったのではないか。端的に言うのと、人間が対象化され物化されるのである。したがって、そこには、人と人との真の関係性が喪失してゆく。子どもは”居場所”がないと感じるのだ。

子どもの問題のために来談する親が、自分が子どものために出来る限りのことはした、ということが多い。それに対して子どもは、自分の親は「何もしてくれなかった」と言う。（中略）親が、子どもの為に何を買ったのか、どこに行ったかなどと、それに費やした費用や労力など、つまり数量化可能なことを考えて発言しているとき、子どもは自分と親との間においてのみ生じるはずの人間としての関係——それは数量化できない——について述べているのだ²²。

“科学”は“研究しようとする現象を自分から切り離して、客観的に観察し、因果的な法則を見出そうとすること”である。ここでの“自分”とはおそらく、“神話による繋がりによって結びついていて自分”を指していると考えられる。つまり、“科学”とは“研究している現象を、物語による結びつきから切り離して、客観的に観察して、そこに因果的な法則を見出そうとする”と同義である。

例えば、この文章では家族の“神話”が出てきている。これは“帰属する共同体で物語られている家族像”のことだ。具体例をあげるとすれば、“家族的な雰囲気”という言葉がある。これは一般的に“和気藹々とした”とした雰囲気を指す言葉だ。反対に言えば“家族”という言葉には“和気藹々としている”像があることを示している。これが我々の所

属する現代の共同体の“家族神話”である。



この“家族神話”に基づいた“物語の繋がり”を人が得るのに難しい条件は必要ない。ただ親と子という間柄を持ち、共に物語り合うことで彼らは“家族神話”による繋がりを得る。もちろん、“家族神話”における“文化的価値観”において善いか悪いかの問題はある。“人の親とは思えない”と評価されるような親もいるように、その価値観においての優劣はあるだろう。しかし、そのような優劣はあれ、親は親となった時、子は子となった時からその神話の結びつきを得る。なぜなら、帰属する共同体には“家族として

生まれたからにはこのように結びついていると語り継がれてきた文化的価値観”があるからである。“文化的価値観”としてある以上、その条件が満ちたと同時にその関係は自動的に発生し、機能する。この為、“物語による繋がり”が強く機能していた時代には、生まれた時からその繋がりの中に自分を置くことが出来た為、孤独による不安を感じずに済んだのである。

一方で、“科学的な思考”は物事を“文化的価値観”から切り離れた上に成り立つ。この例では“お金”が挙げられているが、お金も“文化的価値観”から切り離された“普遍性”があるものだ。具体的に言えば、一万円札が二枚あったとしよう。一枚は“文化的価値観”から“善”とされるような事柄が付与されている。もう一枚は“悪”とされるような事柄が付与されている。これを“文化的価値観”の観点から見れば、“善”とされる一万円札の価値は、後者の“悪”とされた一万円札より上だ。しかしその“文化的価値観”に応じて“一万円札”の“貨幣として価値”が変動することはない。“善悪の基準”に関係なく、一万円札は一万円としての貨幣としての価値に見合った対価を得られる。そういう意味でお金には、“文化的価値観”から客観的で、“普遍的”な、貨幣としての価値を持っている。これ自体は決して悪いことではない。しかし問題は、その“科学的な思考”を、人と人との結びつきにまで拡大し、使用してしまっていることである。

人は、自分の帰属する“物語による関係性”から切り離されると、耐え難いほどの不安や孤独からの避難する場所を失う。自身が大きな仕組みの中のほんの小さなものとして理解するという事は自分の無力さ、孤独さを理解してしまうことと同義であり、“物語による繋がり”によって回避できていたはずの恐怖と直面することになる。そして不安や孤独からの避難場所を得られなければ、人はその不安や孤独に耐え切れず、押しつぶされてしまう。しかしもともと「関係性」から引き離すことを基盤としている科学に、そのような機能を求めることは出来ない。

例文において父親は“子どもに対して費用は払ったのだから、自身は父親としての役割を果たしている”と考えている。しかし前述の通り、“費用”は“文化的価値観”からは客

観的なものだ。基準が違うと言ってもいい。“和気藹々としている家族像”に近い家庭ほど“保養を多く払っている“わけではないのだ。反対に言えば、どれほどお金を払ったとしても、娘に不安からの避難所を提供することは出来ない。だからこそ余計に、娘は孤独による不安感から逃れる為に、”物語による繋がり“を求める。しかし父親は”物語による繋がり“というものを見過ごし、貨幣としての価値でしか彼女との家族関係を見ていない。だからこそ、娘との間に食い違いが生まれてしまうのである。

ではなぜ、“物語による繋がり”はここまで軽視されるようになってしまったのか。またこの“物語による繋がり”が失われたことで、現代社会にどのような影響を与えるのかについて、次章から具体的に解説した書物として、エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』から読み解いていきたいと思う。なぜなら『自由からの逃走』とは、“物語による繋がり”から切り離された後の共同体における、個人の心理的問題を指摘するものだからである。

“物語による繋がり”から読み解く『自由からの逃走』

はじめに、そもそも『自由からの逃走』がどのような目的で書かれた本であり、どのような内容を記したものなのかを確認する必要がある。下記の内容は、『自由からの逃走』の書かれた目的を記した箇所である。

本書の主題は次の点にある。すなわち近代人は、個人に安定を与えると同時に彼を束縛していた前個人的社会の絆からは自由になったが、個人的な自我の実現、すなわち個人の知的な、感情的な、また感覚的な諸問題の表現という積極的な意味における自由は、まだ獲得していないということである。自由は近代人に独立と合理性とを与えたが、一方個人を孤独におとし入れ、そのため個人を不安な無力なものにした。この孤独は耐えがたいものである。かれは自由の重荷から逃れて新しい依存と従属を求めるか、あるいは人間の独自性と個性とに基づいた積極的な自由の完全に進むかの二者択一に迫られる。本書は予測よりもむしろ診断——解決よりもむしろ分析——ではあるが、その結果はわれわれの行為の進路に一つの方向性を与えている。なぜなら、全体主義がなぜ自由から逃避しようとするのかを理解することが、全体主義的な力を征服しようとするすべての行為の前提であるから²³

ここで独自の単語が出てきているので、まずは文章の要となっている「前個人的社会の絆」「自由」、そして「全体主義的な力」の意味をそれぞれ明確にし、関連性を明らかにしたいと思う。まずは「前個人的社会の絆」を明確にしたい。次の文章では『第一次的絆』と別の言葉で記述されているが、後の記述に「前個人的存在」という言葉がある。『第一次的絆と』結ばれていた個人が『前個人的存在』とされているのだから、この絆を『前個人的な絆』と呼んで問題はないと考えられる。では詳しく見ていこう。

私は、個性化の過程によって、個人が完全に解放される以前に存在にするこれ

らの絆を、『第一次的絆』と呼ぼうと思う。それは人間の正常な発達の一部であるという意味で有機的である。子供を母親に結び付けている絆、未開社会の成員をその氏族や自然と結び付けている絆、あるいは中世の人間を教会やその社会的階級に結び付けている絆は、この第一次的絆に他ならない²⁴。

この文章から分かることは、絆とは“親子”や“共同体”や教会などの複数の人間を結び付けているものである。更に具体的に『第一次的絆』というものを表現しているであろう、中世社会の生活に対して言及している箇所も見てみよう。

近代社会とくらべて、中世社会を特徴づけるものは個人的自由の欠如である。当時のひとはだれでも社会的秩序の中で、自分の役割へつながれていた。(中略²⁵) 個人生活も経済生活も社会生活も、全て規則と義務とにしばられ、実際に個人が自由に活動する余地はまったくなかった。

しかし近代的な意味での自由はなかったが、中世の人間は孤独ではなく、孤立していなかった。生まれたときからすでに明確な固定した地位を持ち、人間は全体の構造の中に根を下ろしていた。こうして、人生の意味は疑う余地のない、また疑う必要もないものであった。人間はその社会的役割と一致していた。かれは百姓であり、職人であり、騎士であって、偶然そのような職業を持つことになった個人とは考えられなかった。社会的秩序は自然的秩序と考えられ、社会的秩序の中ではっきりとした役割を果たせば、安定感と帰属感とが与えられた。そこには競争はほとんど見られなかった。ひとは生まれながらに一定の経済的地位におかれ、それによって、伝統的に定められた生活程度は保障されたが、同時に、より高い上層階級の人間に対する経済的義務は果たさなければならなかった。しかしこのような社会的地位の限界を破らない限り、自由に独創的な仕事をする 것도、感情的に自由な生活をする 것도許されていた。(中略)

多くの苦悩や煩悶はあったが、一方に教会があつて、その苦悩はアダムの罪の結果であり、各人の罪の結果であると教え、この苦悩はやわらいでいた。教会は罪の意識を助長したが、同時に神の絶対的な平等愛を保障し、神に許され愛されているという確信をうるための道も与えられていた。神に対する関係は、疑いや恐れであるというよりも、むしろ信頼と愛情であった。百姓や町の住民が、自分の住む小さな地域から外に出ることがまれであったように、宇宙もまた限られており、簡単に理解できるものであった。地球と人間が宇宙の中心であり、天国と地獄は未来の生活の場であり、一生の間の全ての行為は、明らかな因果関係の糸に結ばれていた²⁶

この記述から分かることは、中世社会においては“伝統的に守られてきた階級制度や、それに伴った社会的秩序を守って生活していた”ということになる。伝統的というのとは、語り伝えられてきたという意味では“物語としての関係性によって結ばれたもの”と同義である。例えば百姓や職人、貴族という階級制度は生まれながらにして富の配分に差を生み、“物語による関係から切り離して物事を考える場合には”異常である。しかしそれは伝

統的には当然のものだった。伝統は伝統であるからこそ正しいのである。そしてこの伝統と言う“物語による関係性”によって強く結び付けられていたことで、共同体の中で暮らす人々は孤独や不安を感じることはないものの、関係性から切り離された状態という意味での“自由”を得られない生活を送っていたのである。

“自由”についても明確にしておこう。フロムは「ここでの自由とは『……への自由』という積極的な意味ではなく、『……からの自由』という消極的な意味のものである。すなわち、行為が本能的に決定されることからの自由である²⁷⁾」としている。本能に関して、フロムは肉体的な欲求——食欲や睡眠欲、性欲の他に、“孤独から逃れたいという欲求”があることについて言及しており²⁸⁾、「宗教や国家主義も、まったく馬鹿げた他の習慣や信仰と同じように、もし個人を他人と結びつけさえすれば、人間のもっとも恐れる『孤独』からの避難所となるのである」と書いている。つまり言い方を変えるならフロムの自由とは“孤独からの避難所として物語による繋がりに結びつこうとする本能からの自由”と言える。つまり現代における問題点というのは、孤独からの避難所として機能していた物語による関係性から自身を切り離されてしまったという、受身のような状況におかれたが、孤独や不安に押しつぶされることなく、その状況下で活動するような状況にはないということを問題視しているのである。

人間の社会史は、自然と一つに融合していた状態から抜け出し、周囲の自然や人間たちから分離した存在として自己を自覚したときに始まる。しかしこの自覚は長い間非常にぼんやりとしていた。個人は依然として、自分が抜け出てきた自然的社会的世界と密接に結ばれていた。分離した存在としての自覚を一方に持ちながら、かれはまた、周囲の世界の一部であるとも感じていた。個人がその原始的な絆から次第に脱出していく過程は——それは『個性化』の過程ともいえよう——宗教改革から現代までの近代史において、その頂点に達したと思われる²⁹⁾

つまり、フロムの言うところでは、人間が“物語による関係性”を持つのは孤独から逃れようとする本能からのものである。そして人間の社会とは、その関係性から切り離して物事を考えようとする方向性にある。中世においての“長い間非常にぼんやりとしていた、個人が自然的社会的世界と密接に結ばれていた状況”は、「関係性から自身を切り離す」という科学的な思考を持てるような成長段階に達していなかったということであり、後に近代に入って、自身を関係性から切り離した“科学”的な思考を持つようになる³⁰⁾。しかし、ここで問題になってくるのは前半でも紹介した物語による関係性を失ったことによる孤独と不安の増大である。科学的な思考が主流になると共に、今まで物語によるつながりによって確保されていた孤独や不安からの逃避場所を失った個人が取り残されてしまった³¹⁾。

人間にとって孤独による不安が耐えがたいものだということは『自由からの逃走』にも次のように書かれている。

一つの重要な要素は、人間は他人と何らかの共同なしには生きることができないということである。どのような文化の下でも、人間は生きようとする限り、敵や自然の脅威から自分を守るためにも、あるいは働いたり生産したりすることができるためにも、他人と共同することが必要である。(中略)

しかし『帰属』を求める要求を、そんなにも激しいものとするもう一つの要素がある。すなわち主観的な自己意識の事実、あるいは自己を自然や他人とは違った個体として意識する思考能力である。(中略) すなわち自己を自然や他人とは違ったものとして意識することによって、またたとえばんやりとはしていても、死や病気や老衰を意識することによって、人間は宇宙や自分以外の全てのものと比較して、自分がどんなに無意味で卑小であるかを感じないわけにいかなくなる。どこかに帰属しない限り、また生活に何らかの意味と方向とがない限り、人間はみずからを一片の塵のように感じ、彼の個人的な無意味さに押しつぶされてしまうだろう。彼は自分の生活に、意味と方向とを与えてくれるどのような組織にも、自分を結びつけることができず、疑いでいっぱいになる。そして結局はこの疑いのために、彼の行動する力、すなわち生きる力を失うのである³²。

この「疑いのために、彼の行動する力、すなわち生きる力を失う」というのは、第一章におけるクーンツの「全宇宙における自分の存在を問い詰めてゆくと、広大な浜辺の砂粒よりも小さく、力ないものに思えて、ただもう耐えられなく、自滅的になってしまうものだ」という発言と強い関連性があるのが分かるだろう。ここまでが、『自由からの逃走』と物語論の関係である。では次は先に、この物語による関係性を失った後、孤独と不安が増大したことで、どうして全体主義と結びつくのかを見てみよう。

個性化の過程の他の面は、孤独が増大していくことである。第一次的絆は安定性をもたらし、外界との根本的な統一を与えてくれる。子供はその外界から抜け出すにつれて、自分が孤独であること、すべての他人から引き離された存在であることを自覚するようになる。この外界からの分離は、無力と不安の感情を生み出す。人間は外界の一構成部分である限り、個人の行動の可能性や責任を知らなくても、外界を恐れる必要はない。人間は個人となると、独りで、外界の全ての恐ろしい圧倒的な面に抵抗するのである。

ここに、個性を投げ捨てて外界に完全に没頭し、孤独と無力の感情を克服しようとする衝動が生まれる。しかしこれらの衝動やそれから生まれる新しい絆は、成長の過程で断ち切られた第一次的絆と同一のものではない。ちょうど肉体的に母親の胎内に二度と帰ることができないのと同じように、子どもは精神的も個性化の過程を逆行することはできない。もしあえてそうしようとすれば、それはどうしても服従の性格をおびることになる。しかもそのような服従においては、権威とそれに服従する子どもとのあいだの根本的な矛盾は決して除かれない。子どもは意識的には安定と満足とを感じるかも知れないが、無意識的には、自分の払っている代価が自分自身の強さと統一性の放棄であることを知っている。このようにして、服従の結果はかつてのものとはまさに正反対である。服従は子ども

の不安を増大し、同時に敵意と反抗とを生み出す。そして、その敵意と反抗は、子どもが依存している——依存するようになった——まさにその人に向けられるので、それだけいっそう恐ろしいものになる³³

「個性化」というのは、前述にも出てきた通り、人間が成長するにしたがって科学的な視点を手に入れ、物語の関係性から切り離れたものの考え方ができるようになることとほぼ同様に見なしてよい。その為、前半で語られているのは、物語から切り離して物事を考えるようになるに連れて孤独と不安が増大したということを話している。そして、次に語られるのが全体主義に走るメカニズムの一端である。つまりこの不安に対して、人間は、物語から切り離して物事を見るという意味での自由を手放そうとするのである。しかし、一端手に入れてしまった科学的な考え方を放棄しようとしても、本当は理解してしまっている。理解はしているが、気づいてしまえば彼は孤独による恐怖に直面する。だから“気づいていない”体を装い、自身も“気づいていない”と思い込もうとする。しかし物語による繋がりに対して、科学的な視点から見た時に生じる矛盾を感じ取ってしまう状態——ここでは“不信感”とするが、この“不信感”を持ったまま“物語の繋がり”に没頭としても、“不信感”は残り続ける。この“不信感”がある限り、完全な孤独や不安からの逃避場所としては機能できない。ではこの“不信感”を持った人間がどのような行動を取るのかについて、フロムはカルヴァンの予定説を例に挙げて語っている。

カルヴィニズムは絶え間ない人間の努力の必要を強調した。人間はたえず神の言葉に従って生活し、その努力を怠ってはならない。この教えは、人間の努力がかれの救済にとって、何の役にも立たないという教義と矛盾するように見える。どのような努力もしないという運命論者の態度が、はるかにふさわしいように思われるであろう。しかし心理学的に考えれば、そうではないことが分かる。不安の状態、無力と無意味の感情、とくに死後の世界についての懷疑は、だれにもほとんど耐えられないような精神状態を示している。このような恐怖に打たれた人間は、誰でも、努力を怠ったり、生活を楽しんだり、また未来に無関心であったりすることはできないであろう。この耐え難い不安の状態や、自己の無意味さについての萎縮した感情から、逃れることのできるただ一つの道は、カルヴィニズムできわめて優勢となったまさにその特性だけである。すなわち熱狂的な活動となにかをしようという衝動の発達である。個人は疑いと無力さの感情を克服するために、活動しなければならない。このような努力や活動は、内面的な強さや自信から生まれてくるものではない。それは不安からの死に物狂いの逃避である³⁴

この孤独による不安からの“死に物狂いの逃避”は、“科学”的な思考を徹底的に放棄し、自身の帰属する“物語による結びつき”に対して熱狂的に活動しようとする働きである。その為、この“科学”的には異常と見られることであっても、“物語による結びつき”によって正しいとされることであれば、それは間違いのない正しいものだとして“思い込もう”とする。この思い込みには“疑う”ことは許されない。疑ってしまえば孤独による不安を直

に感じてしまうからである。この不安からただひたすら逃避する為だけに物事に熱狂的に打ち込んだ結果、“物語的な繋がりから切り離して物事を考える際には明らかに異常だと思えるようなことを引き起こしてしまう”ことになる。具体例を出すのであれば、ナチスによるユダヤ人大量虐殺などが挙げられるだろう。フロムは本論において、ファシズムと個人の心の働きの結びつきについて言及しているが、今回の論文で重要なのは、ファシズムの政策自体ではなく、この“死に物狂いの逃避”というもののまでのメカニズムである。

ナチスは顕著な例として提示されやすいが、この“死に物狂いの逃避”から起こる問題というのは、姿や形を変えて様々な社会的な、特にデモクラシーという仕組みに対する危機の要因となっているとフロムは語っている。ここまでの物語論と『自由からの逃走』の関連性および、その中で問題になっている“物語による繋がりを失ったことによる孤独による不安の増大によって引き起こる、”物語による繋がりから切り離して物事を考えるという意味での自由からの死に物狂いの逃避“というメカニズムである。

第三章 “特撮ヒーロー”における“文化的価値観”

”特撮ヒーロー”の系譜は『月光仮面』（1958－1959）から始まり、『仮面ライダー』が始まる1971年まで約30作品³⁵作られた。このうち、川内康範が脚本家として制作した作品が9作あり、彼の創作した作品には共通するテーマがあると述べている。

「月光仮面」のキャッチフレーズは、「憎むな 殺すな 赦しあいましょう」というんだけど、皆さんはご存じだったでしょうか。僕の家は日蓮宗の小さな寺だったんで、子どもの頃から朝夕2回の読経を耳にして育ったんです。だから、最初にTBSから話があったとき、すぐにお釈迦様の説いた「借無上道」の言葉が思い浮かんだ。「借無上道」——。すなわちこの世で最も尊い行いは、無償の愛だという意味です。お釈迦様の教えの中で、一番大切なのが、この無償の愛ではないでしょうか。

（中略）

僕も月光仮面では、伝えなかったことの何分の一も形にできなかった。その想いが、のちの『七色仮面』や『愛の戦士レインボーマン』『ダイヤモンド・アイ』なんかを作る原動力になった。もっとも、どの作品も”借無上道”の精神＝無償の愛という共通のテーマが秘められているのは同じです。それでなければ、川内康範のヒーローものではないでしょう³⁶。

ここでの“無償の愛”とは“自分への見返りを一切期待せずに善行を行うこと”と捉えることができる。「憎むな、殺すな、赦しあいましょう」という言葉は“自分に対して被害が出たとしても、それを許せるだけの度量を持つ”ということであり、これは“自分を犠牲にして仏教の文化的価値観における善を行え”と同義であると捉えられる。これと関連することとして、島田は『ウルトラマン』の作品に含められた“文化的価値観”を次のように分析している。

ウルトラマン一族から、その命を預けられることになる主人公の青年たちは、多くは自己を犠牲にして、命を失った人間たちであった。

(中略)

ウルトラマンたちは、そういった自己犠牲を厭わない、純真な青年に地上での自分たちの命を託すことになる。日本の宗教の世界には、「本地垂迹説」という考え方が発達し、仏や菩薩が衆生を救うために、仮に日本土着の神などの姿をとってあらわれるとされたが、仏像の姿をモデルに作られたウルトラマンは、この本地垂迹説の現代版としてみる事が出来る。

(中略)

ウルトラマン一族が、M78 星雲からは宇宙の彼方にあり何の利害関係も無い地球の平和のために戦う動機はきわめて薄弱である。しいていえばウルトラマン一族の仏教的な「慈悲」の心によるものとし考えられない。やはりウルトラマンは阿弥陀如来や弥勒菩薩の化身なのではないだろうか³⁷。

これらの記述から、『ウルトラマン』は“特撮ヒーロー”の元祖『月光仮面』と、同作者の作品群の系譜を受け継いだ作品として捉えてよいだろう。つまり、“特撮ヒーロー”のテーマとは“仏教的な慈悲”として語り継がれてきた“文化的価値観”を、“自己犠牲の精神を持って果たそうとすること”である。しかし、この『ウルトラマン』という作品は、『月光仮面』までの“特撮ヒーロー”の系譜が気づきあげてきた“文化的価値観”を語り継ぎながらも、それを崩壊させるような危機に直面する。これが『ウルトラマン』という作品が“特撮ヒーロー”の系譜の中で転換点となる所以であり、後に登場する『仮面ライダー』の作り出そうとする“新しい文化的価値観”の礎となっている。とりあえず『ウルトラマン』の内容分析を行う為にも、物語のあらすじを簡単に説明しよう。

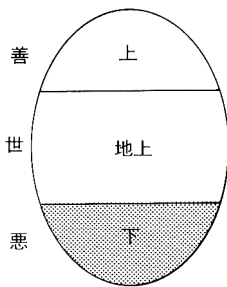
“地球から百万光年離れた場所にある M78 星雲（通称”光の国”）にある宇宙警備隊の隊員ウルトラマンは、護送中の宇宙怪獣ベムラーを逃がしてしまう。彼はそれを追って地球に訪れるが、たまたまパトロールをしていた地球の警察組織³⁸「科学特捜隊」の飛行機³⁹と衝突し、乗っていた青年ハヤタを死なせてしまう。ウルトラマンは申し訳ないことをしたと謝罪し、ハヤタと一心同体になることで彼を生き延びらせる。ハヤタと一心同体となったウルトラマンは、普段はハヤタとして科学特捜隊の一員として生活する。しかしベムラーをはじめとした巨大な怪獣や地球の侵略を目論む宇宙が現れた際に、ウルトラマンの姿となって怪獣や宇宙人と戦うことになる。”

“悪”の怪獣や宇宙人を、“ウルトラマン”が倒すという勧善懲悪劇は、第一章のニックスが言う“ドラマ”と同じものであるが、興味深いのは村瀬の“三界論”である。この論は、劇中で表現される“善”と“悪”の使者に一定の法則があることを示している。具体的な記述を見てみよう。

私たちが、「球体」の上にいるというような科学的な見方⁴⁰を教わる以前は、地

面の下にはそれこそずーっとはてしなくつづく「下」があるのだと思っていた。「はてしなく」とか「どこまでも」という言い方自体がまだ科学的すぎていけない。そうではなく、「自分」の下に「下という世界」がでーんと「ある」のだと思っていた頃があるのである。私は今、この観念を問いたいと思っている。

世界には「上」と「下」があり、その間に私たちが住んでいるという観念は、実は子どもっぽい科学以前の世界観というのではなく、ある「倫理的な世界観」を表していたのである



この「倫理」の世界の中では、世に認められ、陽の当たるところにいる人が「上」にいる。そこは一般には「世の中」と呼ばれている。ところが、そういう「世」に出られない者たちもいる。そこが「下」として意識されてきたのである。世に出られないもの、その者たちはまた、「浮かばれない者」として言われてきた。彼らは要するに沈んでしまっており、「上」に浮かんでこれられない者たちのことである。

一般に、こうした「世」に認められるためには、そこにふさわしい姿・形を持っていなければならない。それは「倫理的にふさわしい姿・形」である。そうした「世＝地上」に出られない者は、何らかの形で、姿・形が歪んでいたのである。

子どもたちが、まだ「科学の見方」を知らないうちは、この「地上」にいる自分は独特な形で感じさせられている。この「地上」にいるためには、子どもたちはいつも親やまわりの大人たちの良しとする窮屈な姿・形を取り続けていなければならないからである。それが「よい子」という姿・形であった。「よい子」は、言葉づかい、身だしなみ、行儀、お手伝い、学校の成績等々において、親や大人たちが「良し」と認める姿・形であった。この「よい子」でいることが子どもたちにとっては、まさに「地上」や「陽の当たるところ」にいられるようになっていた。だから、そこから外れると、押入れに入れられるか、闇夜に放り出されるかで「陽の当たらないところ」にお仕置きとして追いやられるのであった⁴¹。

この分では「上」と「地上」の違いが明確にされていないので他の記述にて補足しよう。次の文章は「地上」ではなく、「上」の世界に関する具体的な記述である。

また逆に、子どもの頃、自分の住んでいるところの「上」に何かがあるという感じを持つことも常にあった。宇宙とか天体といった科学的な上空のことではない。これもまた何やら「上」としか言いようのない現実感覚なのだ。とにかく「上」の世界がある。そこには天人や天女が住んでいる。神様や仏様と言ってもいいのだろうが、とにかく何やら不思議な力を持った美しい人たちがそこに住んでいる。私はそう感じていた。こうした羽衣を着た天女のイメージなどは、全くのおとぎ話もいいところなのだが、自分の住んでいるところの「上」にも世界があるという感覚は、決して空想の産物ではないように感じられた⁴²。

このことから、「上」の世界とは「善」がある場所として描かれるのが分かる。我々が生

活している“地上”よりも“上”の場所に、神仏など“善”を代表する者がいる。彼らの直下で暮らしている人々は、“善”から降り注ぐ光の恩恵を受けて暮らしている。“善”からの恩恵を受けて人々が暮らす場所、これが“地上”である。しかし、光の恩恵を受けるには、それに見合った形を持っていないといけない。俗に「お天道様に顔向けができるか」というような意味で、“倫理的に正しい”生き方をしているかどうかが問われ、それに合わないようなものは“下”の世界に追いやられる。これが“三界論”における世界観である。

この世界観は、前述の“物語による繋がり”、“文化的価値観”、そして日常に暮らす人々の関係を、子どもの立場から見たものとして捉えることができる。“文化的価値観”は、古くからの伝統として“物語られ続けてきた”ものだ。子どもたちは、周囲の大人から“物語たられる”ことで、その“文化的価値観”を構築していったのである。第一章で河合は「天に輝く太陽を見て」人々が物語り始めたと記述した。この太陽のある“上”が“物語”の構造として重要な位置を占めるようになっていても不自然ではない。少なくとも“特撮ヒーロー”の物語の“上”からは“善”を代表するヒーローがやってくる。“地上”の人々は“上”に行くことは出来ないが、“上”にいるヒーローによって見守られ、生活を続けている。

この“上”と“下”の世界とは、我々が“物語による繋がり”で生まれた“文化的価値観”を、実生活と結びつけた世界観とも言えるだろう。広い大地があって、自分がある。その自分は同じ光の下で自分とは異なった人々と結びついている。結び付けているのは、陽の光。それが降り注ぐ“上”の世界の住民——神、仏によって結び付けられている為である。しかし、その陽の光が届かない“闇”からは、なぜか“光”に結び付けられた人々に襲い掛かる“何か”が潜んでいる。これが光が届かない“下”の住人——鬼や悪魔と呼ばれる存在だ。

物語の中で重要な位置を占めていた“太陽”は“善”と結びつき、その光における恩恵は“善による結びつき”として捉えられた。一方では“善による結びつき”が届かない場所に置かれた“悪”は、“光”の届かない場所である“下”と結びついた。このことから“上”と“下”とは“文化的価値観の中で善悪を、我々の住む地上から位置関係として捉えたもの”としてえ考えることが可能だ。そして、“地上”とされているのは“文化的価値観において、善によって結び付けられている共同体”を表している。このことを象徴するのが、『ウルトラマン』における、“地上”の味方組織「科学特捜隊」である。

「科学特捜隊」とは「怪事件や異変を専門的に捜査し、宇宙からのあらゆる侵略から地球を防衛する⁴³⁾」、三界論で言う“地上”の組織である。ここでは優等生かつ没个性的なハヤタと、人格者のリーダーであるムラマツ、射撃の得意な熱血漢アラシ、おっちょこちょいの科学者イデ、紅一点のフジ・アキコが働いている⁴⁴⁾。物語は主に彼らの視点から語られるわけだが、この組織に関して奥村と香山・速水の両名、原田は次のように語っている。

国際警察機構の日本支部と言う立場にありながら、幅広い自由裁量剣と独自性

を持つ自律的組織として、科特隊は臨機応変に行動する。この集積化と分散化のパラドックス⁴⁵を巧みに取りこんだシステムに、今日の地球規模経営のエッセンスを見ることができる⁴⁶

過去の歴史をひもといってみても科特隊ほど、士気が高い組織は存在しなかった。それはいわゆる「宗教的確信」に由来する「異端の組織」⁴⁷のモチベーションではなく、あくまで合理的な企業経営の組織作りの努力から生まれたもの⁴⁸

「ウルトラマン」全話からうかがえるムラマツ班の特性は、ムラマツを擬制的父、フジを擬制的母（あるいは姉）とする、家長性的な疑似家族である
（中略）

TVの前子どもたちを魅きつけた要因の1つには、その科学特捜隊がかもしだす家族的雰囲気があったのではないか。家族以外の現実の組織にそうした雰囲気を求めることは困難なばかりではなく、場合によっては有害である。家族と言うのは温かいものであると共に、多分にわずらわしいものであるからだ。しかし、フィクションの世界でだけは組織に家族的雰囲気を求めても良いかも知れない⁴⁹

これらの発言をまとめると、「科学特捜隊」は“出来過ぎとも思えるほどに優秀であり、現実には決してないような家族的雰囲気を持った”組織である。しかしこれを“善によって結び付けられた共同体”の象徴として見れば矛盾はない。単純に言えば、子どもが大人から言われるような「良いこと」に即して考えられているのである。一般的に良いとされる、「皆と仲良くしましょう」「仕事はきっちりやりましょう」などの標語を現実を満たしているような会社像とすれば、これほど出来すぎに描かれても不思議ではない。子どもが惹きつけられたのは、こうした像が自分たちの想像する“地上”の組織像と当てはまり、想像しやすかったと考えられる。一方で、悪役である“怪獣”が子どもたちに受け入れられる理由として、村瀬は次のように語っている。

子どもたちが「地上」にいられなくされたとき、その理由はなかなか承服されがたいことが多かったからである。なんで親がガミガミ怒るのか、何で先生は答えが分からないくらいで自分を悪者扱いするのか……。けれども、さからうことができない。「地上」は彼ら「大人」のものである。そうして子どもたちは「下」の世界に行くのだが、気持ちはむしゃくしゃしてやりきれない。誰か自分に味方してくれる者はいないのか。そこで関心を引かれるのが、すごいパワーの持ち主の怪獣たちであった。

そして、子どもたちは「下」の世界で怪獣に変身し、パワーを持つものとして生まれ変わるのである。ところでこうした「怪獣」の登場するテレビ・ドラマには、やたら街が破壊されるシーンが出てくる。ビルや高速道路が破壊され、「善良な市民」たちが逃げ惑うシーンが映し出される。（中略）

むろん、子どもたちの中には、こういうシーンを見て面白い子もいれば、かわいそうと思う子もいるだろう。しかし、子どもたちが映像として見ている「街」

や「都市」は、それぞれの子どもの置かれている「地上」のという一つの観念に過ぎないことが多い。そこにリアルな現実を見て取ると子は少ないはずである。子どもたちの見ている「街」や「都市」は、それぞれ子どもの置かれている「地上」のイメージに過ぎない。その「地上」が良いところだと感じている子どもたちなら、それが破壊されるのは嫌だと感じるだろう。しかし、自分の置かれている「地上」を嫌なところだと感じている子は、それが破壊されるとスカッとした気分になるだろう。大抵の子どもは半分半分の気持ちでいるから、町が半分くらい壊れるぐらいでちょうど良い気分になるのである⁵⁰

多少比喩的な表現が多いので補足する。子どもたちが「地上」にいられなくなった時というのは、「良い子」でいられなくなった時のことである。前述の通りであれば、成績が悪かったり、身だしなみが悪かったり、そうしたことを通して彼らは大人に怒られる。しかし、逆らうことは出来ない。大人に逆らうということは、その中にある“物語による繋がり”から自分たちを切り離し、孤独に陥ってしまうということを知っているからである。だから彼らの鬱積した感情は、陽の当たらない場所に押し込まれる。これはおそらく、心に秘められることの比喩であろう。しかし、感情が消えることがない。そんな時、自分たちの心に鬱積した感情を代わりに晴らしてくれるものが現れる。それが、『ウルトラマン』の中の怪獣たちだったのだ。

怪獣たちが、「地上」を破壊するというのは、自分たちの鬱積した感情を晴らしてくれるのと同義だ。彼らが「地上」を破壊し、半分くらい壊されたところで、子供たちは満足する。その後、“ウルトラマン”が現れる。鬱積した感情を晴らした子どもたちは、次に“ウルトラマン”に感情移入し、怪獣を倒す。この辺りは“ドラマ”の構造と同じである。“鬱積した感情を悪役に重ねて晴らし、ヒーローが勝利したことで、その共同体の繋がりの中に自分たちが帰属することを再認識する”。

しかし子どもたちは、絶えず共同体によって繋がられるか排除されるかの間に立たされていた。「地上」の中にいる為には絶えず「良い子」でなければならない。しかしその為には自分たちが“それからはみ出すこと”を懸命に避けなければならなかった。それがどんなに自分のしたいことであってもだ。言い方を変えるならば、子供たちは絶えず自分たちが“物語による繋がり”を失うことを恐れていたのである。その為に、子どもたちは“科学特捜隊”によって表現される“家庭的な繋がり”に惹かれ、“物語による繋がり”から完全に切り離された怪獣に感情移入できたのだ。

“感情移入”しやすい“悪”の怪獣と、想像しやすい“地上”の組織である“科学特捜隊”のある『ウルトラマン』の世界観は、子どもにとって受け入れやすかったと考えられる。しかしこの構造で興味深いのは“善”と“悪”の存在——つまり、“文化的価値観”の代表が圧倒的なものとなり、人がどうこうできるものではないということだ。反動的に言えば、“文化的価値観”はすでに完成されており、人々の関与できないほどに協力になった世の中を示しているとも捉えることが出来る。これに関して諫山は“ウルトラマン”を“神”

に例えて解説している。

なにしろ怪獣やウルトラマンの能力は圧倒的で、その存在は〈人間〉の心理を超えてしまっているのだ。ウルトラマンと怪獣の闘いはいわば神々の闘いであって、もはや人智の及ぶ範囲にはない。そもそもあのような物理学を超えた闘いに〈人間〉の介入する余地などないのである。

だから〈人間〉は祈る。自分たちに害をなす〈悪〉の神である怪獣を、〈善〉の神であるウルトラマンが倒してくれるのをひたすら祈る。こうして祈ること以上のことが〈人間〉にできるわけではないのだ⁵¹。

この強力な“文化的価値観”に支えられた『ウルトラマン』の世界観を作り出した中心的人物として、金城哲夫⁵²が挙げられる。彼は物語の中核を作り出している人間であり、彼の思想は『ウルトラマン』に直線的に繋がっていると考えておかしくないだろう。彼がその世界観に込めたとされる願いを、具体的な記述から見てみよう。

金城は初期作品「バラージの青い石」（南川竜と共作）でウルトラマンがはるかな昔、人類の祖先と心の言葉で語り合っていたことを明らかにする。それは、国家や民族の違いを超えた平和な時代であったと想像できる。

沖縄人である金城がウルトラマンやその故郷「光の国」に託したものは、超国家的、超民族的な博愛主義、コスモポリタニズムであったのだろう。それはまばゆいばかりのイメージで少年時代の私たちを魅了した。

沖縄は当時日本として認められていなかった。自身が「日本」と「沖縄」の境界に立つ境界人としての意識が強かった彼は『ウルトラマン』の世界観に、国家や民族を超えた超国家的民族的な強い国家像を重ねていた。これにあわせて考えれば、“善”の代表として描かれる“ウルトラマン”が完全無欠、諫山の言葉を借りるならば“神”として描かれてもおかしくない。彼にとっての“ウルトラマン”とはどんな人間でも受け入れられる新しい国家共同体の理想像であったのだろう。しかし『ウルトラマン』の脚本家は1人ではない。ある話は金城でも、別の話は違う人間によって書かれることも多い。その中の一人、佐々木守は、金城が描くのを避けていた『ウルトラマン』の物語の中にある構造を明らかにしてしまう。

「故郷は地球」に登場し、国際平和会議を襲う怪獣ジャミラは、元は人間だった。かつてアメリカ・ソ連という大国間で宇宙開発競争が行われていた時代（つまり『ウルトラマン』放映当時）に、実験の失敗で行方不明になっていた宇宙飛行士の変わり果てた姿なのだ。

僕が「故郷は地球」を観た当時、有人宇宙ロケットの報道は友達同士で話題の中心だった。月面に星条旗を立てたアポロのアームストロング船長は、幾人かのプロレスラーとともに、子どもたちの間で最も有名だった外人の一人だ。だが、彼の栄光の陰にジャミラのような犠牲者がたくさん隠されていたとしたら……。

「科学のために人間を犠牲にしたことが分かったと大変だ。彼のことは全世界にひた隠しにされてきたのである」（シナリオ、ナレーションより）

佐々木は、金城哲夫がゴローやウーに託してそっと告白していた、「怪獣とは歴史の陰で差別されてきた人間の象徴」だという真実を、初めて物語の上でモロに暴いてしまった。

ジャミラの正体を知る、科学特捜隊パリ本部のアラン隊員は日本支部にこう命令する。

「ジャミラの正体を明かすことなく、秘密裏に葬り去れ！ 宇宙から来た一匹の怪獣として葬り去れ！ それが国際平和会議を成功させるただ一つの道だ」

乾ききった惑星に漂着し、怨念のみを糧にしてきたジャミラは、水に弱い体質になっていた。そんなジャミラにウルトラマンは手から水を放出する。もがき、苦しみながら断末魔の声を上げるジャミラ。「国際平和会議」の会場前にたなびく万国旗を一つでも多く打ち倒そうとして、ジャミラはその命を閉じた……。表情のないウルトラマンの「怪獣殺し」がかつてこれだけ冷たく描かれたことはなかった。ウルトラマンと怪獣の係わり合いに腐心した金城の努力を、佐々木は木っ端微塵に砕いてしまったのである⁵³。

これが“特撮ヒーロー”の系譜の転換点である。“物語による繋がり”によって結びついていたのが初期の『ウルトラマン』の世界観であった。しかし、テレビ番組という客観的な視点から物を見ることによって、“怪獣”が“その共同体が存続する為に排除されるもの”であるという事実と、“ウルトラマン”や“科学特捜隊”が“共同体の存続を第一として、その邪魔となるものを排除する”という具体的な関係が示される。そして、その上で共同体を維持する上での邪魔もの“怪獣”と排除されるものの中は、同じく共同体に帰属していた“善”であるはずの人間も含まれている。この問題は“科学特捜隊”のイデ隊員が、ジャミラの正体を聞いた際に放つ「俺たちだってな、いつジャミラと同じにされるのか分からないんだぞ！」の台詞に凝縮される。共同体の存続の為に“怪獣”とされる人間が出る。そして、ジャミラが殺された後には「人類の未来と科学の発展の為に死んだ戦士の魂、ここに眠る」という墓標が立てられる。これに対してイデは「犠牲者はいつもこうだ。文句だけは美しいけれど」という台詞を残して番組は終わる。これを要約すれば、“共同体を存続するために“怪獣”とされ、排除された後は綺麗な言葉を使ってなかったことにされる。これが、現代の共同体の姿なのだ“ということなのだろう。

結果、『ウルトラマン』の中で行われる“善悪”が客観的視点から疑問視され、その価値観に帰属していた人々の結びつきが“自分もまたいつ怪獣とされ排除されるのか分からない”という不安から切り離されてしまうのである。この問題は『ウルトラマン』の世界観で露骨に表現されることはない。しかし切通はジャミラの話の後に出された大江健三郎の「破壊者ウルトラマン」（『世界』73年五月号）の内容を踏まえて次のように述べている。

「破壊者ウルトラマン」が怪獣映画に見出す現実の図式化は、次に集約される。

- ・怪獣＝公害、核の被害者 または あらゆるマイノリティ（沖縄、アイヌ人など）
- ・ウルトラマン＝科学の神 または アメリカ帝国主義
- ・怪獣の破壊＝戦災（東京大空襲、原爆、沖縄戦など）

こうした図式は、金城哲夫がいつも、露になってしまうことを恐れていたウルトラマンの本質だった。それはまた、戦後の良心的インテリの代表選手である大江健三郎が主題化し続けてきたモチーフでもあった。彼はずっと、一小説家というワクを超えて、〈核〉〈戦争〉〈マイノリティ〉の問題を引き受けようとしてきた。

（中略）

そんな大江健三郎から観れば『ウルトラマン』は子どもたちに安保を推奨し、科学振興を吹き込む、許せないものだったのかもしれない。

金城哲夫もまた、「破壊者ウルトラマン」を呼んでショックを受けていたのを上原正三は記憶している⁵⁴。

『ウルトラマン』は、大多数の人々を“物語による結びつき”で結ぶ為に、それから切り離された少数派を“悪”として攻撃する。“悪”とされた者に“悪”とされるには不当な理由があったとしても隠し通され、“物語”の中で倒されることを正当化される。この問題は、あるいは“特撮ヒーロー”の系譜の中でも続いていた問題であったかもしれない。

『ウルトラマン』によって表現されるはずだった“超国家的超民族的な国家像”は、ジャミラの存在によって、やはり“少数派を退治することで大多数を結び付けているもの”と変わらなかった。その為、当時の沖縄と日本という“国境”間にいた金城は、どちらから居場所を失ってしまう。なぜなら、国家は国家である限り、少数派を排除するのだ。沖縄人にとっての日本人は排除されるものだろう。日本人にとって沖縄人は排除されるものだろう。では、沖縄と日本の間にいる自分はどうなるのか。彼は、彼を取り巻く“物語による繋がり”を失い、孤独に陥る。このことは、“怪獣”に自分たちを重ねて見ていた子どもたちにも少なからず伝わったはずである。

ジャミラは、もともと科学特捜隊の人間と同じように“地上”の人間だった。特に悪いことをして“下”の世界に送られたわけではない。彼はまさに共同体における「よい子」であったはずである。しかし思わぬ“事故”によって惑星に取り残された“彼”は“国家の威信”を守る為に、救われることなくひた隠しにされた。このことによって、理想的国家像は“万能”なのではなく、“万能”となる為に都合の悪い事実を隠蔽する、存在として疑問視されるのである。これは“物語による繋がり”から切り離したものの考え方として、科学的な考えと言えるだろう。子どもたちは、これによって『ウルトラマン』の世界観に不信感を抱くこととなる。まさに、“科学”的な考えによって“物語による繋がり”が解体されるというのを“物語”を通して描ききったのである。

“物語による繋がり”によって構成された“世界観”を科学的な視点から見た時、それは理にかなったものとして捉えることができるか。これは金城にとって重要なテーマになっ

たはずである。彼は『ウルトラマン』の最終話で、“ウルトラマン”を怪獣に倒させ、怪獣を“科学特捜隊”に倒させる。これは今までの関係性から考えれば、“少数派を切り捨てて大多数派を結束させていた物語による繋がり”が、“切り捨てられた人々の怨念”によって破綻した後、“地上に住む人々”がその“怨念”を克服し、これから生きていけるということを楽観的に描ききったのである。これだけならば、まだ金城にとって切迫したものにはならなかっただろう。問題はその次回作である『ウルトラセブン』によって起こる。金城は『ウルトラセブン』における戦いを“正当防衛”として捉えることで、“物語による繋がり”の代わりに“科学”的に正当化できるような理由を作り出そうとした。

『ウルトラマン』の後番組である『ウルトラセブン』の企画には、怪獣殺しの罪悪感から免れるために苦心した跡が見られる。

まず『セブン』の敵は、全て異星人（と、それに操られる宇宙怪獣）に統一された。

（中略）その時代に地球人類は発達した科学によって「完全な平和」を実現していたが、今度は“恒星間戦争”という名の“大国間の植民地戦争”に巻き込まれてしまう。そこで人類は自衛のために地球防衛軍を設立する。（中略）

侵略してくる宇宙人は、地球人を遅れた下等な存在としてみなしている。

（中略）

そういう設定にすれば、地球人の戦いは、軍事大国の侵略行為に対する自衛、抵抗と言うことになり、正当化されるはずだ。

（中略）

だが、この設定にもやがて破綻が生じた。

異星人を外国人のニュアンスで描いてしまうことによって、物語から神秘性や曖昧さがなくなり、現実の民族と国家の問題から逃げられなくなってしまったのだ。

「ノンマルトの使者」はその意味で代表的なエピソードだ。

（中略）

本当の地球人はノンマルトという種族なのだが、後からやって来た〈今の地球人〉に陸地から海底に追いやられた。そして今、人類はその海底さえ奪おうとしている――。

（中略）

結局、隊長はノンマルトは宇宙人なのだとすることにして自己正当化し、雨あられの猛攻であつという間にノンマルトの都市を滅ぼしてしまう。そして彼は狂ったように叫ぶ。

「ウルトラ警備隊の全員に告ぐ！ ノンマルトの海底都市は完全に粉碎した！ われわれの勝利だ！ 海底もわれわれ人間のものだ！」

（中略）

ナショナリズムを強く主張する人間がキリヤマ隊長のようにエキセントリックになるのは、自分の拠って立つ「日本民族」というアイデンティティに、実は実態がないことを知っているのではないだろうか。⁵⁵

“物語による繋がり”に対して“科学”的な視点からの“正当性”を導き出そうとした。だがその結果、“物語による繋がり”の根幹でもある“文化的価値観”が、その共同体の都合の良ように改変されたであることが浮き彫りとなった。同時に、“善を代表するウルトラ警備隊”も、善の使者であるはずの“ウルトラセブン”も“善である”と言う根拠は完全に崩れ去ってしまった。そして自らが“善である”という根拠が揺らいだ時、“善の共同体”は自らを正当化させる為に、少数派を排除し自分たちの繋がりを得ようとするということをはっきりと表してしまったのである。これによって“特撮ヒーロー”によって語り継がれてきた“善と悪の基準”は完全に破綻する。

次章との関連から少し、関係性を明確にしよう。“地上”に対し、“ウルトラマン”は、“怪獣”になぞらえた“少数派”を倒すことで、人々に“超国家的超民族的な国家像”という“物語による繋がり”を与えていた。しかし、その“少数派”の怨念は“ウルトラマン”を倒し、その“国家像”を破壊した。『ウルトラマン』は“少数派を叩くことで繋がりを得るような仕掛け”がなくても、“地上”は“科学”的な考え方をもった人々の力によって運営させることが出来る、という希望を残した。

しかし今度は、“物語による繋がり”の代わりに“科学的な考え”を使って物事の正当性を図ろうとした『ウルトラセブン』が作られた。すると今度は、より明確に現実の国家像というものが見えてきた。“自分たちの正当性”を得る為に、“少数派”を排除して“ありもしない国家神話”（ここでは自分たちが地球人であるということ）に自分たちを繋ぎとめようとする“地上”の人々が描かれた。その姿がまるで、“侵略者であるかのように”だ。

“物語による繋がり”を体現していた“ウルトラマン”とは異なり、“ウルトラセブン”は“地球人と宇宙人の架け橋となろうとする個人”を象徴していた⁵⁶。だがその宇宙人という出自から他の警備隊員からたびたび孤立するが、時にウルトラ警備隊の一員だと自分を繋ぎ止める為に、ノンマルトの時や別エピソード⁵⁷でも無理をして納得しようとしている描写が見られる。彼は最終話で、もう一度怪獣と戦えば死んでしまう程ボロボロになりながら、敵に捕らわれて仲間から見捨てられたチームメイトの一人を救う為に闘う。彼は辛くも勝利し、宇宙へ帰ろうと辛うじて飛び立つが、その後の生死は分からない。だがその悲壮感は生きて母星に帰ったようには見えない。

モロボシ・ダン“は”“物語による繋がり”を失った後の世界で必死に自身を、ある共同体の“文化的価値観”に結び付けようとした。だがその努力の結果、消耗し、死を迎える。これは当時の社会像の一面を映し出したものとして捉えることができるだろう。善も悪の基準も見失った世界で、共同体の文化的価値観に必死に自身を結び付けようとした個人が破滅する。これがウルトラマンからセブンに掛けて訪れた“特撮ヒーロー”の“文化的価値観”に起こった転換点である。

第四章 仮面ライダーの“文化的価値観”

この章では、前章からの関連性を絡め、『仮面ライダー』の文化的価値観を明確にする。しかし『仮面ライダー』には、『ウルトラマン』の金城哲夫のように、制作の中心となる人物を特定することは難しい。一般に有名なのは“原作者⁵⁸”と呼ばれる石ノ森章太郎だが、テレビ版を主に制作したプロデューサーの平山亨だ。その為、様々な製作者の考えが交じり合っていることが分かる。しかし原作協力を依頼したということ、また結果的に“原作者”と評されていることから、石ノ森の思想が色濃く反映されているのは間違いない。ちなみに石ノ森は『仮面ライダー』と『ウルトラマン』の関連性を次のように述べている。

はっきりいうと『仮面ライダー』というのは、『ウルトラマン』がいないと存在しなかったかもしれない。つまり『ウルトラマン』の“巨大さ”というのは、神の視点をもつヒーローなわけだよ。そうじゃなくて、人間という目線ならどういうヒーローができるのか、というところで初めて、ああいう等身大の、悩める主人公の青年像という発想が出てきた⁵⁹。

『ウルトラマン』には描かれなかった、人間の視点を持った“特撮ヒーロー”を作る。このことから『仮面ライダー』が、『ウルトラマン』とは別の視点から、“特撮ヒーロー”の“文化的価値観”を描き出そうとしていることが分かるだろう。さて、まずは『仮面ライダー』を分析する前に、物語のあらすじを見てみよう。

城南大学の生化学研究室の大学院生・本郷猛は、オートレーサーのチャンピオンを夢見る青年だったが、レースの訓練中に、国際的な秘密結社ショッカーに誘拐され、戦闘用人間としてサイボーグ手術されてしまう。

(中略)

ナレーション「本郷猛が耳にしたショッカー、それは世界のあらゆるところに網が張られる悪の組織なのだ。(中略)ショッカーの狙いは、世界各国の人間を改造し、その意のままに動かして世界征服を計画する恐るべき団体なのである」

ショッカー首領「我々が求めている人間は知能指数六〇〇、スポーツ万能の男、君は選ばれた栄光の青年だ」

本郷「(怒り)バカな、俺はショッカーに入ったつもりはない」

ショッカー首領「ハハハハ……遅いのだ、本郷。君の意志に関わらず、君はすでにショッカーの一員にほぼなってしまっているのだ。君が意識を失ってすでに一週間、その間にショッカーの科学グループは君の肉体に改造を施した。君は今や改造人間なのだ。改造人間が世界を動かし、その改造人間を支配するのが私だ。世界は私の意のままになる」

(中略)理不尽の一言に尽きる脳改造の寸前、ショッカーにだまされて協力していた恩師の緑川博士の援助で、ショッカー基地を本郷と緑川博士は脱出していく。だが、サイボーグ化された本郷の体は、二度と普通の体には戻れないのだ。深

い悲しみと怒りを胸に、本郷猛はショッカーによって与えられたサイボーグの能力を使い、ショッカーに敢然と闘いを挑んでいく！！⁶⁰

この“ショッカー”に闘いを挑む際に、“本郷猛”が“仮面”をつけた姿のことを、“仮面ライダー”と呼ぶ。あらすじに関しては多少台詞が混じっているが、後々の分析において重要な部分があるので、そのまま記載した。これらが第一話で説明された後、第二話以降は次のような流れで物語は展開される。

- (1) “世界征服”を企む秘密結社“ショッカー”が、部下である“改造人間”を使って、人間社会にある組織、共同体などを秘密裏に襲撃し、作戦⁶¹を達成させようとする。
- (2) 襲撃された組織や共同体の“優秀”な人物は改造人間にされるか、“殺されたくなければ言うことを聞け”と脅されて、ショッカーの作戦の為に協力させられる。それ以外の“無能”な人間は殺されるか、実験台にされて殺される。
- (3) このまま作戦が進めば、人間社会に絶大な被害を与えることが分かる。
- (4) 途中、ショッカーの作戦に気がついた“本郷猛⁶²”は、“立花藤兵衛”を始めとした協力者と共にその解決を試みる。結果、作戦を遂行しようとしていた“改造人間”と遭遇し、“本郷猛”と敵対する。
- (5) 決戦の場面となって、“本郷猛”は“仮面ライダー”に変身し、敵の改造人間と戦う。この場合、勝利することもあれば、敗北することもある。敗北した場合は、次週にて“特訓”というものが行われる。
- (6) 勝利した後は人間社会に対する絶大な被害は回避される。しかし次の闘いはすぐそこまで迫っているとナレーションが入り、その週の番組は終了する。

さて次に、『ウルトラセブン』までの系譜の中で示された、現代の共同体と個人の間で展開されている問題点を確認しよう。

- (1) 自身の所属している共同体の“文化的価値観”を示す“物語”が、“科学的な考え”に解体されたことで“ジャミラ”の存在が分かり、“善悪の因果関係”が破綻していることが明らかになった。
- (2) “善悪の因果関係”が破綻していると、“物語”は不完全なものとなり、“物語による繋がり”が失われる。その為、個人は“精神的孤独からの避難場所”を失った。
- (3) “精神的孤独”から逃れる為に、個人は共同体に対して“対価”を払い、得られる繋がりを代用しようとする。しかしこれは“物語による繋がり”とは違い、“対価”を払わなければ、すぐに“避難場所”を失う。
- (4) “精神的孤独”から逃れ続ける為に、個人は“対価”を払い続けられるような状況に自身を置くことに執着する。この執着は、自分以外の“個人”を排除するという考え方に結びつき、結果的に彼も自分以外の“個人”を排除する側に回る。

この問題と密接に関連しているのが、『仮面ライダー』の悪役組織“ショッカー”である。先ほどのあらすじにも“ショッカー”の目的に関する記述があったが、更に明確に表したものとしては次のような文がある。

ここでの“愛の絆”とは、“姉弟”の神話のことを指している。つまり“改造人間”以外の人々が暮らす場所は“神話”によって成り立っているということになる。同時に、“改造人間”はその“物語による繋がり”から切り離されたもの、あるいは“物語による繋がりから切り離された者”と同義だ。“ショッカー”は、自分の目的の為に、“物語による繋がり”の中にいる人間を切り離し、“ジャミラ”に変える。言い換えるならば、“自身の存続を最優先し、ジャミラを作り続ける共同体”の象徴が、“ショッカー”なのである。これは『仮面ライダー』第一話の冒頭でも確認できる。以下は冒頭シーンの流れであり、“本郷猛”が“物語による繋がり”の中にいる人物として紹介される場面である。

①オートバイに乗った本郷猛が、レース場を一周する。

②タイムを計っていたレーシングコーチ“立花藤兵衛”が語りかける。

立花「んー……なかなかの調子だ。しかしこの程度のラップタイムじゃ、まだまだグランプリの優勝は難しいぞ、本郷」

③本郷が笑って答える。

本郷「はっはっは。かなわないな、立花さんにあっちゃ。よおし、もう一週回ってきます。今度は十秒くらいは短縮して見せますからね」

④立花が本郷のバイクを送り出して、その後本郷への人物像を独白する。

立花「よおし、行って来い」

立花「ふう……全く、子どものような奴だ。しかしライダーとしては超一流。しかも城北⁶⁷大学生化学研究室きっての秀才とは、誰も信じられんだろう」

“立花藤兵衛⁶⁸”は後に“おやっさん”という愛称で呼ばれ、『仮面ライダー』シリーズ第七作まで“仮面ライダー”の協力者と登場する。“仮面ライダー”にとってはいかなることがあっても崩れない“物語による繋がり”を表現する人物である⁶⁹。彼らの間には友好的で破綻してない関係が築かれている。言い換えるなら“本郷猛”と“おやっさん”の間には、“対価”を払わなくても切り離されない、明確な“物語による繋がり”が存在しているのだ。あるいは“本郷猛”が“善人”であり、何の不幸も訪れていないという現状から、“善悪の因果関係”が崩れていない状態とも言えるだろう。“善は報われ悪は懲らされる”という関係が成り立っているから、“本郷猛”という善人は何の不自由もなく生活が続けられている状況にある。こうした意味において、最初のシーンの“本郷猛”は“物語の繋がり”のある世界観にいる。あるいは、その存在が疑われていないという意味で『自由からの逃走』における「前個人的社会」の中にいる。

しかし彼は突然“ショッカー”に拉致されてしまう。自身に何の責任もない。彼はただ“善人”であり、社会的に問題のある行動をしていたわけでもない。かえって、優秀であった為に拉致されてしまうのである。ここで勧善懲悪の因果関係は完全に崩れる。善側にいる“本郷猛”が拉致され、肉体を改造されることはまさに、視聴者の見ている『仮面ライダー』の世界観が、“物語による繋がり”から切り離されたことを示している。

一応“本郷”は“緑川博士”に救出される。もしも人間のまま救出されていれば、“善人”である彼が救われたということで、善悪の因果関係は保たれていただろう。しかし、彼は“改造人間”にされていた。“改造人間”にされたということは“この世に善悪の因果関係が成り立っていないこと”を客観的な事実として刻まれたということだ。前のような生活に戻ったとしても、ただある“物語の繋がり”のある世界を信じることはできない。それはいつ“ショッカー”によって切り離されるのか分からないし、いとも簡単に切り離されることを知っているからだ。しかも永遠に“改造人間”から“人間”へは戻ることはできない。“改造人間”になった人間は“本郷猛”のように永遠に“ショッカー”に狙われるか、“脳改造”された者のようにショッカーの意のままとなるしかない。“脳改造”に関しても詳しく見ていこう。

ショッカーの科学者：「脳改造が済み、指令のままに動くようになれば、君は完璧なショッカーの一員になれる」

本郷猛：「死んでも、貴様の思い通りの人間になるものか」

ショッカーの科学者：「誰しもがはじめはそう思う。そしてやがてショッカーの一員であることに感謝するようになる」

“脳改造”を受けた“改造人間”は、“ショッカー”の組織に喜んで尽くすようになる。“脳改造”を受けた“改造人間”を“怪人”、あるいは下級兵士の“戦闘員”と呼ぶが、両者は自分の命も顧みずに、ただ首領の命令の為に命を投げ出して戦う。最もそれを表しているのが、第15話『逆襲！サボテグロン』における怪人“サボテグロン”の台詞である。

ライダー！ 貴様の為に、メキシコでの輝かしい成績も、日本での失敗で失われた。俺は死ぬ。が、一人ではない。サボテグロンの栄光の名、ショッカーに残す為に！ 貴様も一緒だ！⁷⁰

ここでの「俺は死ぬ」というのは、作戦を失敗した“役立たず”として、“ショッカー”に殺されるということだ。つまり「今までは尽くしてきたのに、失敗したら処分される」という理不尽さを持った組織である“ショッカー”に対し、それでも一員でいたいと願っているのである。

ここで少し関係性を整理してみよう。まずショッカーの組織的構造は次の通りである。

(1) 首領と呼ばれる、“怪人”たちの行動を決定する絶対的指導者がいる。彼の命令に逆らったり、自分の使命を果たせない“怪人”は処分される。

(2) 首領の下にいる“怪人”、更にその下の“戦闘員”はショッカー首領の命令に従い、自分の任務を果たす。その任務の種類としては誘拐、破壊、殺人など、主に他者を排除するような任務である。

これは次のように言える。“怪人”は、“ショッカー”によって“ジャミラ”にされた個人である。『ウルトラマン』に登場した怪獣としての“ジャミラ”は、復讐の為に共同体を

破壊しようとした。結果、共同体に処分された。しかし“怪人”は、自身が排除対象になった後も、自身がその共同体に対して有益であるということを見せることで、排除対象から外れようとする。言い換えるなら、自身が排除対象から外れることと引き換えに、その共同体に対して滅私奉公をする“ジャミラ”が“怪人”なのである。さて一方で、ショッカー首領が“怪人”たちを率いて何をしているのか。明確に表現されているのが、第三話『怪人さそり男』のナレーションとショッカー首領の台詞である。

ナレーション「ここはそのショッカーの秘密基地である。(中略) その、さそり男の実験に、この基地で強制労働させられていた、何の罪のない人々が、疲労で働けなくなったという理由だけで、死刑と称して殺されるのだ」

ショッカー首領「ショッカー組織の中であって、君たちは選ばれた改造人間にもなれず、また戦闘員、技術員など、適応しない人間として死刑囚になった」

この後、疲労困憊の人々は砂漠の中を逃げ切れたら自由にするとやると言われ逃走するが、結局ほぼ全員が殺される。このことから“ショッカー”は“怪人”を使い、“下等”と評した人々を強制労働させた上、実験台として殺している。つまり一方では誘拐した人間を支配側の“怪人”とし、もう一方は被支配者としての“下等”な人間としていることになる。

しかし実際は支配者側にいる“怪人”も排除される側なのだ。怪人は、自身の排除を、他者を排除し続けることで延期させているに過ぎない。言い換えるのならば、“他者を排除し、自分の有能さを見せる”という対価を払い続ける代わりに、共同体の繋がりの中に自分を置き続けようとしている個人が“怪人”だ。片方は排除される恐怖から逃れる為に支配する側に回り、もう片方は支配される側に回される。しかしそれぞれは違う役割を与えられていても、いずれ個人は、共同体の運営の為に排除されてしまうのである。

この“ショッカー”の社会像を身近に捉える為に、就職を探す学生の話に重ねて考えてみよう。学生たちは、「努力をすれば必ず就職につける。努力しなければならない」という“善悪の因果関係”があると信じて就職活動に励む。

しかし就職活動を長く続けるうちに“努力したからといって必ず就職できるとは限らない”という現実を見せ付けられる。これによって、学生たちは「自分は就職できないのではないか」という不安に襲われる。これから逃れる為に活動に励んだ結果、彼らにはそれぞれ別々の役割を与えられる。

- (A) 就職が決まったもの。
- (B) 就職が決まらずに落とされ続けたもの。

(A) は (B) とは違って就職が決まったので、自分は一般に“社会人”と呼ばれるような人々の中に帰属し、安堵感を得る。しかしその安堵感は「いつ自分が切り捨てられるのか」

という“不安感”を伴っている。この“不安感”を回避するにはその仕事に“成功し続ける”しかない。“成功し続ける”には、成功に結びつくことだけを考えなければならない。するとそれ以外のことに気を回すことができなくなり、“成功し続けることだけ”を優先する考え方と結びつきやすくなってしまう。例え犯罪行為だと分かっている、他者に出し抜かれる危険性を大きく減らすことが出来るのであれば、行ってしまう者もいるだろう。それが他者の生命の危険が伴うことであっても、自分の身を守る為に、見てみぬふりをするか、自分から相手を蹴落とすような行為も辞さなくなる。

また(B)の場合、自分が就職できない状態に置かれ続けると、それに対して努力することに無力さを感じ始める。“社会と呼ばれる大きな世界の中で、自分という力の及ばない小さなものがある”という実感は、“精神的孤独”を生み出す。それは自分に強い無力感を生じさせ、抵抗する気力を失わせるのである。その無力感は自身が破滅するまで続いていく。これがショッカーの支配する世界である。

“世界中の全ての人々を、自身が排除されない為に別の人間を排除する“支配者”と、その支配の前に抵抗する気力を失っている“被支配者”のどちらに配属させ、それによって成り立つ共同体に帰属させること”、結果、全ての個人がいずれ破滅する共同体の実現が、ショッカーの“世界征服”なのである⁷¹。ではこれに対して“仮面ライダー”の体現する“善”とは何か、具体的に示したいと思う。

仮面ライダーの“仮面”

“本郷猛”は“改造人間”にされた後、“仮面”をつけて“ショッカー”と戦うことを決意する。この“仮面”をつけた“本郷猛”が“仮面ライダー(1号)”である。物語の構造としては、今までの“特撮ヒーロー”同様、“善”の“仮面ライダー”が“悪”である“ショッカー”を倒すことで“勧善懲悪”を示すことになる。

しかし『ウルトラマン』以前の“善”の象徴であった“文化的価値観”の中の“善悪の因果関係”を、“勧善懲悪”の根拠とすることはできない。端的に言えば“物語”の中で“世の中が荒んだ時に、助けを求める人々の祈りを聞いて、天から降りてくる勧善懲悪の体現者はいない”ということだ。例えば“ウルトラマン”は大江健三郎によって“科学信仰の神”だと評された。言い換えるなら、世の中が荒んだ時に、“科学”という人智を超えた“場所”から“善悪の因果関係”の体現者として現れて、世の中を良くするものが“ウルトラマン”である。極端な言い方をすれば、“世の中が荒んだとしても、科学を信仰し生活していけば、いつかはウルトラマンのような超人的な力によって、自然と荒れた世は正常に戻るだろう”という楽観的な思考を生み出す源とも言えるだろう。これに関連した、『仮面ライダー』の世界観に関する記述がある。

ウルトラマンでは、科学は正義の側が使用して人類の進歩に貢献するものであ

るという一点は、どんなシリーズにあっても普遍の定義であったように思う。(中略) 彼らは現代の科学を駆使し、さらにウルトラマンの持つ超ハイテクノロジーの助けを借りて、人類を守るのである。

だが、仮面ライダーにおいては、科学は怪人、つまり悪の側が最大限に活用して人類を滅ぼそうとする者であり、本郷らがそのショッカー軍団の最先端のハイテクノロジーを使って改造されるなど、科学の持つ“負の部分”が強く押し出されていたといつてよい。

(中略)

今日、私たちは、科学は万能ではありえず、科学による人類の発展とか進歩とかいうものは、ひょっとしたら幻想かもしれないと感じ始めているが、最先端科学で武装された“悪の軍団”ショッカーが登場したことは、そうした今日の私たちの感覚をあらかじめ先取りしていたと言えるだろう。

したがって仮面ライダーは、科学は人類の進歩の為にあるといった、それまでの楽観的な“思想”を大きく乗り越え、時代に警鐘を打ち鳴らすものであったとさえ言える⁷²。

『ウルトラマン』まで続いていた“神仏”がいると感じ、共同体の発展を楽観的に信じられていた世界観が崩壊した。結果、実際の共同体を見直してみれば、広まっていたのは、“共同体を存続する為に個人を排除することも厭わない機構”であった。同書において、“ショッカー”に関しても記述している。

悪の軍団の命令系統は完全な上意下達であり、絶対服従の組織である。(中略) しかも、彼らは自分たちの味方さえ信じることはなく、ただ自分がどうすればより権力を握る地位に上がることだけを考え、そのためには味方さえ裏切ることもある。そこにはだから、信頼、倫理、常識といったものは何もない。ただ力のみが唯一、自身の存在を決める方法なのだ。

うがった見方をすれば、それは当時エコノミックアニマル(この言葉は奇しくも六九年以降、流行語となった)とさえ呼ばれた、企業に自分の存在を服従させることによるのみ生きること“実感”できた企業戦士の姿にオーバーラップさせることができただろう。あるいは汚職や権力欲にまみれた官僚や政治家たちの姿にダブらせることもできるだろう⁷³。

前述の通り、“ショッカー”は“支配者”と“被支配者”の関係を生み出し、お互いに争い合わせることで個人を圧迫する機構を表している。信頼、倫理、常識は、“善悪の因果関係”——善が報われ、悪が懲らされるという前提が成り立っていなければ信じられないという意味で、“物語”的なものとして捉えることができる。“物語”的なものが成り立たない社会像というのは、今までの記述通りである。この“物語”が成り立たず、“神仏”がありえない状況だからこそ、“ショッカー”という“悪”が生まれている。ではどこに“勧善懲悪”の要となる“善”を生み出すのか。それが“仮面⁷⁴”である。開発当初、『仮面ライダー』の企画書⁷⁵には“仮面”について次のように書かれている。

「仮面は人類の歴史とともに発生し、それをつけることによって、一つの人格が別の人格に生まれ変わる。別の人間が仮面の下に誕生し、その人間が日常性を脱し、我々の悩みを解決してくれるとしたら、それに勝る快事はない⁷⁶」

“仮面”をつけることで、“別の人格”が生まれる。この“別の人格”が、物事を解決するような役割を担う。言い換えるならば、個人が作り出した“仮面”が、物事の問題に対処する働きを生み出すということを指している。また『仮面ライダー』の企画段階において、次のような事実があったという。

よみうりテレビで放送されていた『タイガーマスク』について子供たちに調査したデータの中に、“子供たちはタイガーマスクが仮面をはずした伊達直人になるとやさしく普通の男なのに、タイガーマスクの仮面をつけると無敵のレスラーになる部分に惹かれている。自分も仮面をつければヒーローになれるという夢、願望に答えているようだ”という部分があり、「まったく新しい仮面ヒーローを作ろう」と新企画の方針が決まっていた⁷⁷。

“仮面”を最初に作り出したのは別人であったとしても、“仮面”をつければ、誰でもその“仮面”に宿った“別の人格”を宿することができる。この“別の人格”に関して、次のような記述がされている。

先に“仮面”に対してスタッフが企画書に「別の人間が仮面の下に誕生し、その人間が日常性を脱し、我々の悩みを解決してくれるとしたら、それに勝る快事はない」と書いていたことを明らかにした。(中略) 彼らは、仮面に、自分たちの力を持ってしては不可能だった、この心のじくじくとして暗い暗雲を吹き飛ばす力になればという願いを込めたと言える。それがたとえ意識さえされることのない願い出はあったとしても、その時代をいき、その時代の暴風にさらされた人間たちにとっては、切実な願いだったはずである。

(中略)

彼ら、あるいは私たちが生きた時代が、いやおうなく仮面ライダーを求め、だからこそ、それが映像となって表出した、ということである。時代意識が無意識のうちに“像”となって焦点を結んだものこそ仮面ライダーであると、私は言いたいのだ。仮面をつけなければ強くなれないヒーロー。だが逆に言えば、仮面は、その下にある人間の良心を強固に守るものでもあったということだ⁷⁸。

これらをまとめると、次のようになる。仮面ライダーは、“当時の社会問題に直面した個人の、切実な願いが具象化したもの”である。そして、その“仮面”が示しているものは、個人の“良心”を象っている。これを前の記述と合わせるならば、この“良心”は、“仮面”を被った誰しもが宿することができるものである。つまり、“個人を犠牲として消費し続けながら存続し続けようとする共同体のあり方を打開したいと願う個人の良心”が形作られた

ものであり、誰しも“仮面”を被ることで心に宿すことができるものだ。つまり、その良心を持つことが出来る個人であれば、誰でも、ヒーローとなりうる可能性を示している。それが“仮面”なのである。石ノ森も対談の中で、次のように語っている。

石ノ森 『仮面ライダー』の生まれた時代というのは、日本が社会的上昇気流の中で勢いづいて公害とか、企業の社会悪がはびこり始めている時代だった。企業が儲かればいいのか……それに対抗するヒーローの、個人の力強さへの信仰みたいなもの、それが“怒り”や“グロテスクなヒーロー”という仮面ライダーになっていたのかも知れない。

(中略)

——仮面ライダーは、まさに怒りのマスクですが、先生のキャラクターはそういうテーマから来たデザインというのは多いんでしょうか？

石ノ森 キカイダーがあるな。あれは自分で言うのも何だけど仮面ライダーより傑作かもしれない。

(中略)

石ノ森 誰の中にもあって、それがあの日何かのきっかけで開花していく——そういうニーチェじゃないけれど、超人思想というか、まだまだ人間には可能性があるんだと思いたい。人間への信頼っていうのかな。それが根底にあって、普通の少年や青年でもヒーローになれるという、そういう発想がある。

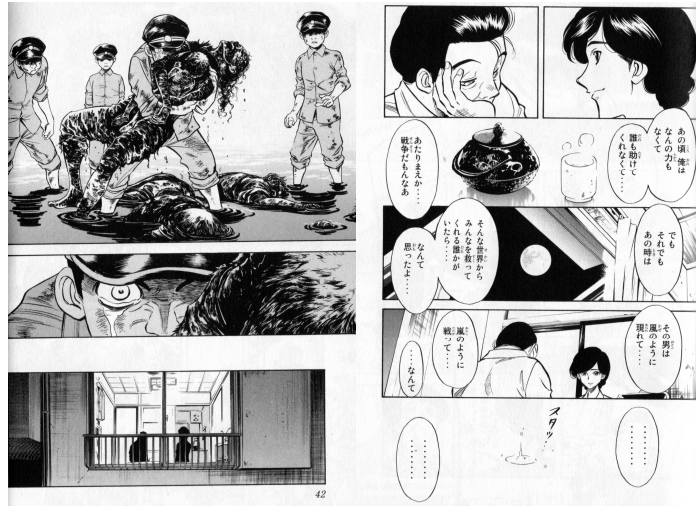
(中略)

石ノ森 平凡な人間だから、正しいこと、人間らしいことがヒーローの基本線になっていく。やはり「正義が勝つ」というものすごいシンプルな基本は、僕は大人になっても持ち続けるべきだと思う。そういうシンプルな考え方に対して冷ややかになっているじゃない。世の中というのは、みんな灰色で、何がよくって正しいか、何が悪いのかっていうのが釈然としない、というのが全員に行き渡っている。子どもにまでそういうのが広まっていて、みんな冷ややかな目で世の中を見ているという状況は怖いと思う。

ヒーロー物に託した最大のメッセージは、どういう大人になっても、「やっぱり正義は勝つんだよ」ということを、シンプルでも、みんながあざ笑おうが、人間として心のそこから思おうということなんだよ。それを言い続けて生きたいと思うんだよ。

石ノ森によれば、“仮面ライダー”の“仮面”は、“個人を犠牲とし消費し続けながら存続し続けようとする共同体のあり方への怒り”を示している⁷⁹。また共同体の“善悪の因果関係”が破綻している現代の状況が、石ノ森の言う“灰色の世の中”と同義だとすると、彼はその中でも明確な“善悪の因果関係”を示しているものがあると言う。では、“文化的価値観”からの“善悪の基準”が破綻した後も通用する、善と悪とは何なのか。これに関連したこととして、平山亨が『仮面ライダー』のプロデューサーとなり、形を成すまでをドキュメントとして描いた漫画『仮面ライダーを作った男たち』を見てみよう。この作品は、取材した事実をもとに再構成したものである。

内容を要約すると、「平山は戦時中、東京に住んでいた。ある日の空襲後、隅田川が焼死体で埋め尽くされた。彼は少年兵としてそれを片付けることになった。その中で、子どもを抱きながら死んだ焼死体を発見する。他の少年兵は運び易くする為なのか、それを引き離そうとする。彼はそれを止め、一緒に運び出そうとする(中央)。当然のように人が死に、親と子が引き離される。戦争としては当然のことだ。しかし、そのような状況でも、この現状から救い出してくれる誰かにいて欲しかった」。この想いを、“仮面ライダー”を伝って表現しようとしている。



ここでの“悪”とは“戦争のため”に“当然のように人が死に、親と子が引き離される”という現状である。これは石ノ森が言及していた“企業の儲けのため”に“公害を撒き散らし、多くの人々に死と障害を与えた”こととほぼ同じ関係である。あるいは、前述した“存続することだけを最優先として、成員を犠牲とするのにためらいのなくなった共同体”の像とほぼ同義である。平山はこれに怒りを感じた。この怒りが“仮面”であり、ここから生まれた“別の人格”が、この戦争という現状を打破してくれる。そんな願望が現れているのが、“仮面ライダー”ということだ。

表現を変えるなら、次のようになるだろう。今までの人々は、次のような段階を踏んだ。

- (1) 共同体の中で“物語による繋がり”に守られ、安定していた。
- (2) “物語による繋がり”から切り離されて、共同体の文化的価値観の善悪の基準が、“その共同体にとって都合の良いように書き換えられるもの”だと知り、不信感を抱く。
- (3) 不信感に気づいていないと思い込む為に、その共同体の価値観に熱狂的に没頭する。

これを『仮面ライダー』は、

(3´) 自らの体験の中から“善悪の基準”を再構築して、それを基に自身の役割を果たす。

に作り変えることができるとしたのである。多くの人々が“不信感を忘れる為の熱狂的な活動”を行ってしまうことで、共同体は個人を破滅させる。しかし、共同体を作っているのはそもそも個人である。個人がこの“不信感を忘れる為の熱狂的な活動”を回避することが出来れば、“存続することだけを最優先として、成員を犠牲とするのにためらいのなくなった共同体”ではなくなる。これによって、“個人の自由が確保された社会”を作り出す働きを生み出そうとしたのである。

これに関連した“物語”として、マガジン・ノベルス・スペシャル『仮面ライダー1971

年』がある。これは“本郷猛”が“仮面ライダー”になるまでの過程を再構築して作られた公式の二次創作品である。設定などは石ノ森やテレビ版とは異なっている部分が多い。だが〈ショッカー〉が“存続する為に個人を犠牲とする共同体”の象徴であることは同じである。赤星は、“改造人間”にされたばかりの“本郷猛”に語りかけるオリジナルキャラクター“ハヤト”（おそらくは一文字隼人のオマージュではあるが）の口を借りて、ショッカーの働きと、後に“仮面ライダー”となる“本郷猛”の役割を次のように説明している。

「あいつらは、こう言ってる。自分たちは恐怖を武器に、人類を密かに統制する存在だ、と。確かに、〈ショッカー〉の働きによって、人類全体にとって、壊滅的な局面が回避されたことは多い」

（中略）

「自分たちの利益、観念のためとは言え、〈ショッカー〉が種としての人類、人類の文化文明を守ろうとしているのは確かだ。だが……」

（中略）

「……その過程で、あいつらは人間を踏みにじる。あいつらは人間の価値を勝手に決める。不要な人間を犠牲にする。不安をあおるためだけに、平気で命を奪う。それは……」

（中略）

「絶対に許せない」

（中略）

「もしも、〈ショッカー〉によって、年に千人の命が奪われるとしたら」

（中略）

「その中の百人でいい。いや。五〇人でも、十人でも……ひとりでもいい。たとえ、ひとりが守りきれなかったときがあったとしても、それでもいい。守り続ける。投げ出すな。次の一人を守るために戦え。生きろ。人を助けることが大事だ。〈ショッカー〉を倒すことなんか、二の次でいい。容易じゃないってことは、俺も良く分かっている。きっと、おまえには向いていないことだ」

（中略）

「助けられなかった命のことを思うたびに、お前の心は傷つけられるだろう。だが、考えてもみてくれ。誰でも、やってることなんだよ」

（中略）

「人間は寿命が来たら死ぬ。だからといって、病に苦しむ患者を助けることを躊躇う医者がいるか？ 火の中に取り残された人間を救わず、引き返す消防士がいるか？ 特殊な技能、知識があっても、心は普通の人間だ。全能じゃない。助けられないこともある。だが、今日の失敗を理由に、仕事を放棄したりしない」

（中略）

「お前の仕事は、暗闇に取り残された人を救うことだ」

（中略）

「この世の中には、誰にも救ってもらえない人間がいる。厳然と存在する。真っ暗なところに取り残されて、ただ死を待つしかない人間がいる。俺がそうだった。

〈ショッカー〉に捕らわれ、身体をいじられ、残りの寿命はあとわずか……そう告げられたとき、どんな気分がしたことか。この世界で、たったひとり。本当に独りぼっちになったと思った。だがお前の存在を知って、俺は救われた⁸⁰」

共同体は自身を存続させる為に、あらゆる手段を尽くしそうとする。それが成員である個人にどれほどの被害が出たとしても、共同体が守られるならばそれが優先される。しかし、そこに奪われる個人の命がある。その命が平然と奪われることだけは、決して認めてはならない。言い換えるならば“個人の命が平然と奪われること”は決して変わることはない“悪”なのだ。そして、それを守る為に“善”というものがある。この善と悪の基準は決して変わることはない。だからこそ個人は、命を守る為に、“役割”を果たさなければならない。ここで示されているのは医者や消防士であるが、職業は違っていても、“個人の命を守る”という目的だけは変わらない。どんな人間にとっても、その“命を守りたい”というたった1点に関してのみ、共通する要素としてある。そしてそれが人の行動の原理となる⁸¹。

しかし共同体の力は個人と比べれば圧倒的だ。何度も助けようとした命が奪われる。“善悪の因果関係”が成り立たなければ、“物語”として成立せず、個人は無力感に覆われる。しかし、それで無力になってはならない。どんなに当然のように命が奪われていったとしても、命が“助けなくて良いもの”になることはないのだ。みなそれを知っているからあらゆる人間が、命を守ろうと役割を持って生活し続けているのである。言い換えるならば、人はその命が奪われるという“悪”を懲らし、命を守るという“善”を勧めるという“勧善懲悪”を作り続けようと努力しなければならない。

ハヤトが言った“仮面ライダー”の役割とは、助けようとした命が奪われ、“善悪の因果関係”が揺らいだ時の無力感から、個人を守る“絶対的な善悪の基準”だ。“善悪の基準”を保障するものとしては“神仏”に近い。だがその基準は、超人的な人の手の届かないところから現れるものではなく、人間の心の中にあるものを強固に固めた“仮面”——つまり、自分の役割を果たし続けようとする人間の姿によって示されるものなのである。

“物語”の中で“ハヤト”もまた“本郷猛”と同様に身体を改造された“改造人間”ではあるが、失敗作であり、あと数年で死に至る状況であった。実際、彼は“本郷猛”に“仮面ライダー”という名前を送った直後に他界する。しかし、その直前“本郷”は彼に向かって「自分だけの名前ではなく、自分とハヤトの二人の名前」だと言っている。つまり、この場合は“本郷猛”と“ハヤト”は別々の個人であっても、“ショッカー”に対する怒りは同じであり、共に戦うことを決意した。だから自分たちは“仮面ライダー”なのだ、ということを示している。言い換えるならば、“善悪の基準を再構築し、その因果関係を自身の行動を持って示し続けること”によって示される“物語による繋がり”によって結び付けられた個人たちとも言えるだろう。

この“仮面ライダー”の定義は、別の二次創作にも表現されている。同時に、“仮面ライ

“ライダー”がどのような機能を個人に与えるのかを考察する上で、『仮面ライダーSPIRITS』（村枝賢一、講談社、2001）を見てみよう。これは2011年まで続いている、『仮面ライダー』の公式二次創作である。

『仮面ライダー』において、“本郷猛”の協力者として登場するFBI捜査官“滝和也”を主人公として第一話は展開する。舞台は『仮面ライダー』の劇中の年から数年後のニューヨークである。スラム街ハーレムにて、13人もの被害者と失踪者が出ている。それをFBIが捜査をしているが、ほとんど進展していない。“滝和也”は上層部が隠蔽していることを確信しながらも、捜査の鼻つまみ者として追い出されてしまう。

ここから分かるのは、FBIという組織の中も、自分がそこから排除されることを避ける為に、個人の命を守るということを軽視してしまっている、という現状だ。また、仮面ライダーがいないということは、“絶対的な基準の体現者”がいない。つまり、個人排除の上に成り立つ共同体の運営を凝らす役割を持つ者がいないのだから、いつか共同体自身が危機に陥る危険性を示している。そして、“滝和也”以外は“仮面ライダー”や“ショッカー”が架空のものとして扱っており、この作品の舞台は“仮面ライダーやショッカーが架空のものとされる現代社会”を現している。



また“滝和也”も昔は“仮面ライダー”と共に戦った戦友ではあるが、ショッカーやそれに連なる組織の姿が見えなくなった今においては、組織や共同体になじめない鼻つまみ者としてしか扱われない。この物語の“滝和也”は、子どもの頃に『仮面ライダー』を見て、“ショッカー”や“仮面ライダー”が実際にいたと思いながら育った視聴者と、最も似た立場にいる。大人になって一般的な組織や共同体の成員に『仮面ライダー』の内容を話せば「そんなものは子ども番組だ」と相手にされない。“滝和也”は、そんな視聴者たちの代表だと言える。

その後、“滝和也”は、既に知り合っていたハーレムのストリート・チルドレン、スパイクとその仲間たちに会いに行き、談話する。スパイクは、道端で歌っては金をもらい、「アマチュアナイト」という発表会の出演料を稼いでいる。

「アマチュアナイト」とは出演するお金さえ払えば、誰でも歌える発表会であり、同時に大物プロデューサーなどにスカウトされる可能性もあるという。

スパイクは、自分あるいは自分と同じ境遇の子供たちにも「努力すれば報われる」という“善悪の因果関係”が成り立っていることを、自分が先駆者となることで果たそうとしている。

しかし、スパイクはその後、“ショッカー”に同類の“悪”の秘密結社によって、半ば“改造人間”にされてしまう。彼は仲間の血を吸う吸血鬼と化し、どんどんと自分の意識を失いそうになる。今までの論説に合わせるならば、彼は“ショッカー”によって“善悪の基準”がないことを客観的に刻み込まれ、他者を排除してでも自分が生き残ろうとする“怪人”に変えられそうになっている。だが“滝和也”はそれに対し、次のように語りかける。



「昔……仮面ライダーって男がいた……！！」

「あいつもお前みたいにクソどもに体をバケモン同然にされちまった……」

「けどなあ……あいつはそのゴツゴツとした体で悪党と戦い続けたんだよ！！」

「無償でだ！！ 自分のためじゃねえ！！ 他人のためにだ！！」

「今だってそうだ！！ 今だってあいつはどこかで戦い続けているハズだ！！」

「どうよスパイク」「いい話だと思わないか！？」

「お前も同じだ」「お前もガキどもの夢になるんだろう⁸²」

この会話文から“滝和也”が伝えようとしていることは次のように要約できる。

“善悪の基準がないということ”を思い知らされた人がいた。だがその人は、他者を排除し、自分が生き残ろうとはしなかった。この世に因果関係がなくても、他者の命が大切という自身の善悪の基準を守る為に、自身の行動でその因果関係を示し続けようとしている。そして、自分の仲間の夢を守る為に自身の行動で、夢を守ろうとしているスパイクもまた、そうになれる”と語っているのである。だがスパイクは一旦そこで逃げてしまう。“滝和也”はスパイクを半ば“改造人間”にした元凶のもとへ向かい、そこで自身を“仮面ライダー”と名乗る。補足するが、“滝和也”は設定上の“改造人間”ではない。つまり、身体的に常人の数十倍に強化されているわけではない。

“滝和也”は、“ショッカー”によって共同体の“善悪の因果関係”が破綻していることは知っているが、“仮面ライダー”によって個人の“仮面”が“善悪の因果関係”を再構築できるという“物語”を信じている人間だ。彼は自身の行動で“善悪の因果関係”が成り立つことを証明する為に、“ショッカー”に立ち向かうのである。しかし闘いの途中、“仮面”は割れて、個人となった“滝和也”は敗北しかける。彼個人の力では、“善悪の因果関係”が

成り立っていない現状”の前に無力であることを思い知らされる。しかしそこに、“本郷猛”が現れる。彼は“滝和也”の前で“変身”して見せると、「今夜はお前と俺でダブルライダーだからな」と語りかける。“ダブルライダー”とは、“本郷猛”が変身した“仮面ライダー1号”と、“一文字隼人”が変身した時の“仮面ライダー2号”が揃った際の名称である。この二人の関係に関しては次のような記述がある。

自らと同じ宿命を背負い、その悲しみ、苦しみを分かり合える男が世界中にたった一人いる。逆に、その男でなければ自らの苦しみは分かり合えない……⁸³。

要するに、これも“善悪の基準を再構築し、その因果関係を個人が自身の行動を持って示し続けること”によって生み出された“物語による繋がり”に結びついた個人同士と言える。つまりここでの「今夜はお前と俺でダブルライダーだからな」という発言は、“善悪の因果関係を自身の行動を持って示そうとした者は誰でも仮面ライダーであり、誰でもその物語による繋がりの一員となる”ことを示している。そして、“仮面ライダー”がもたらす勝利は、“人を超えたところから現れる神仏”による解決ではなく、それぞれ“仮面ライダー”であろうとした、個人同士の行動の結びつきによってもたらされた結果であるということだ。

このことを補足するように、半ば改造人間となっていたスパイクは、“本郷猛”が持ってきたワクチンによって“人間”に戻る。しかしこれは、前までの“ショッカーの脅威を知らない前個人的社会の人間”ではなく、“ショッカーの脅威は知っていても、仮面ライダーの存在を信じて生活しようとする神話を信じる個人”となったということだろう。なぜなら、“本郷猛”は、スパイクが人間に戻れた要因として「あの子は死に物狂いで人間でいようとした」「人の心にはそういう力もある……」と語っている。これは“ショッカー”に襲われても“善悪の基準を持って、死に物狂いでショッカーに抵抗しようとした結果として、物語の繋がりによって結ばれた人間に戻れた”ということだ⁸⁴。

要するに、“仮面ライダー”には、“神仏によって成り立っていた善悪の因果関係による物語”から切り離された個人を、“個々人の行動によって成り立っている因果関係による物語”に結びつかせる働きがある。しかし、“仮面ライダー”は、全ての個人を“仮面ライダー”にすることを目指しているわけではない。「ショッカーの被害者は俺を最後にしたい」という“本郷猛”の台詞から、自身を“仮面ライダー”となる最後の人間にしたいという想いが確認できる。つまり、共同体の善悪の因果関係が破綻してしまっている状況に立ち会ったことで、自身の行動をもって善悪の因果関係を成り立たせなければならなくなった人を、自身で最後にしたいということになる。このことから、“仮面ライダー”が目指すも



のとは、全ての個人が善悪の因果関係を疑うことなく生活できる共同体の成立なのである。

しかし、それが実現されることはないようだ。なぜなら“本郷猛”以降、“仮面ライダー”となる人物は10人を超える。その間、“ショッカー”は名前を変えながらずっと存在し続けている。しかも『仮面ライダーBLACK』の最終話において、“ゴルゴム”と呼ばれる“悪の秘密結社”の“首領”は最後に「私は必ず蘇る。人間の心に悪がある限り。必ずだ」という言葉を残す。これは人間がいる限り、この“個人を排除しながら存続し続けようとする共同体”はあり続けるという予言である⁸⁵。そして仮面ライダーという“物語”が現代まで続いている以上、個人を排除する仕組みは現代まで続いていることを示している。つまり“仮面ライダー”の物語が必要とされる限り、全ての個人が善悪の因果関係を疑わずに生活できる共同体は成立していないのだ。尤も、それが成立する日が来ることも保障されていない。それでも“仮面ライダー”は自身の行動をもって、善悪の因果関係を成立させ続けなければならない。これによって結び付けられた個人同士の行動による“物語”が、“ショッカー”によって生み出される“個人を排除しながら存続させ続けようとする共同体”を食い止められる唯一のことだからである。

結論

『仮面ライダー』とは、個人が自身の行動によって善悪の因果関係を示すことで、“物語による繋がり”を生み出す“物語”である。もともと共同体には、共同体の中で“善悪の因果関係”を示し、人々を結びつける“物語”があった。それは共同体の成員に楽観的な世界観を示し、自身が共同体を運営する上で排除される対象になる危険性を覆い隠す機能を持っていた。しかし、それが“物語”から切り離れたものの考え方——“科学的”な視点を持つようになって、成員たちは“物語”による楽観的な世界観が信じられなくなった。すると、人々はその共同体から排除されないように、別の他者より優れていることを示しあい、苛烈な競争を始める。この競争の中では、より優れた者だけが正しく、劣っている者はすぐに排除される。排除されない為に個人は、どんな手段を使っても、他者を蹴落とし、自分がのし上がろうとするようになる。結果、共同体は個人を排除しながら存続し続けようとする特色を強め、“ショッカー”に象徴される“個人を排除し存続し続けようとするのが当たり前の共同体”となる。

この“個人を排除し存続し続けるのが当たり前の共同体”となることを防ぐ為に、個人は“個人の命を不当に奪う者を悪とし、それを守ることを善”とした唯一無二の“善悪の基準”を持って、自身の役割と行動でその因果関係を示す。すると、個人の役割と行動が結びつき、大きな“物語”となって、“物語による繋がり”を生む。このことを体現しようとした最初の“特撮ヒーロー”が、“仮面ライダー”なのだ。

“仮面ライダー”が人々に共感される理由は、その“物語”の中で“仮面ライダー”が置かれた状況が自身のおかれている境遇そのものを象徴しているからである。どんなに自身が努力して何かを行ったとしても、目に見える成果があるわけではない。それどころか、

かえって自身にとって良くない結果に終わることもある。これによって個人には、世の中に“善悪の因果関係”が成り立っていないことを強く刻み込まれることになる。すると、いつしか人は成り立っていない“善悪の因果関係”を軽視する。それによって個人は、手段を選ばずにただ善悪に関係のない“客観的”な利益であるお金を得ることに一生懸命になるか、あるいはすべての物事に努力する意味はないという思いに打ちひしがれるようになれば。このいずれかの人々によって運営された共同体は、個人を排除し続け、いずれ破綻する。

しかし、どんなに善悪の因果関係が成り立っていないことを思い知らされても、たった一つだけ変わらないことがある。それが、生を不当に奪うことは悪だということだ。もともと共同体における“物語”は、個人を、“肉体的な孤独”あるいは“精神的な孤独”から回避させる為に生まれたものである。“肉体的な孤独”は、人々が協力し合うことで、回避できるようになった。つまり、個人に不当な肉体的な死を与えない為に生まれたのが“物語”なのだ。そして“精神的な孤独”もまた、“物語”によって人々が“自分が一人ではない”ということを感じることで回避できた。つまり、どちらにしても、“物語”は個人に死を与えないようにするための結束を生み出す為に生まれたのだ。この根底にある“個人を死から守る”という原理だけは、いくら時代が変わったとしても変化するものではない。そしていかなる時代のいかなる共同体に住む人々にも、この原理は通用するはずである。そして現代における、肉体的、精神的孤独から個人を回避させる為に生み出された“物語”が確固とした“仮面”として具象化した。それが“仮面ライダー”なのである。

“仮面ライダー”は、“個人の生を守る”という絶対的基盤から、自身の役割に応じた働きをする。善悪の因果関係が成り立っていないことを思い知らされても、その基盤に踏みとどまり、働きを続ける。そうすれば、個人の働きは身を結び、共同体に届く力となる。これが、“仮面ライダー”の体現するものであり、人々を共感させる理由なのである。

最後に今後の展望として、次のようなことを考えている。まず1つは“仮面ライダー”の“物語”解釈に応じて、30分番組として放映された各話を分析することを考えている。特に“仮面ライダー・シリーズ”で最も視聴率を取ったシリーズ2作目『仮面ライダーV3』の物語考察を踏まえていきたい。論文中で、“仮面ライダー”は物語の中で“善悪の因果関係”が成り立っていないということを思い知らされ、客観的事実として刻まれた“改造人間”となることが重要だと述べた。『仮面ライダーV3』に関しては、それが顕著に現れている。彼は“ショッカー”に類する組織“デストロン”によって、家族を殺されるという場面がある。これは“善悪の因果関係”が成り立っていないことを示すのに最も分かり易く、“命が不当に奪われる”ということをも“悪”とする仮面ライダーの“思想”を最も反映できていたと考えられる。また、主人公を演じた宮内洋が、「視聴率が取れなくなると、V3が再登場するようになった」と言うように、確かに“仮面ライダーV3”はそれ以降のシリーズに度々登場する。このことから、『仮面ライダーV3』が“仮面ライダー・シリーズ”の中で最も的確にその思想を浮き彫りにしたと考えられる。この為、『仮面ライダー』と『仮面ライダーV3』の“物語”を分析していくのが1つの展望である。

あるいは、現在放映されている“平成仮面ライダー・シリーズ”との比較である。今回思想が違う可能性があるとして、取り上げなかった。このことについては、同作品のプロデューサー“白倉伸一郎”の著書『ヒーローと正義』の記述に次のようなものがある。

ヒーローものとは——正義の味方である主人公が、仮面のヒーローに変身して、悪い怪人・怪獣と戦う〈勧善懲悪〉フォーマットの物語。

一般には、そのように思われている。たとえば、悪い怪人がかわいそうな被害者をひどい目に合わせ、ヒーローが義憤に燃えて立ち上がったたりするような、そんな物語を書いているのだと。だからこそ、子供たちはヒーローにあこがれ、ヒーローの存在を願い、「自分もヒーローになりたい」と奮いたつのだと。

しかし、ライダーカードから、そうしたストーリーを読み取るのは至難の業である。

(中略)

それでも、せっせとカード集めにいそしむ子供たちは、仮面ライダーが正義で、怪人が悪だということは知っていた。「このカードからだけでは情報不足で判断できない。暴力的なライダーが心優しい怪人を、欲望の赴くままにいじめている可能性だってある」などと言い出すイジワルはだれひとりとしていなかった。

(中略)

ストーリーとは無関係に、仮面ライダーは正義で、怪人は悪なのだ。

この発言から、白倉は“仮面ライダー”という作品を『ウルトラマン』以前の“神仏”の“物語”と同一視していることが分かる。もし“仮面ライダー”が心優しい“怪人”とやらを、欲望のままにいじめた場合、それはもはや“仮面ライダー”ではない。“仮面ライダー”が制作される過程が考慮されておらず、ただ今までの“物語”の構造に合わせて“仮面ライダー”を語ってしまっている。これで“仮面ライダー”の本質を理解できているとは思えない。もちろん、“仮面ライダー”という名前を使い、シリーズものを10年以上続けているのだから、そこに語り継がれている“物語”はあるだろう。しかし、それを“仮面ライダー・シリーズ”として捉えるには分析が足りなかった。その為、今後の課題として、これら“平成仮面ライダー・シリーズ”との比較をし、その思想の違いについて浮き彫りにするというのも一つの課題となるだろう。

あるいは“仮面ライダー”を“仮面”に関して考察することも一つの課題と言える。平山は「得意のギリシア劇のペルソナ論から引用した仮面劇を軸に⁸⁶」最初の企画書を作ったと記述している。彼が東京大学文学部美術史科の出身であることから考えると、このギリシア劇のペルソナ論に関して専門的に学んだと考えられる。そして彼は、仮面ライダー以降にも多くの“特撮ヒーロー”を生み出しており⁸⁷、昭和54年の『バトルフィーバーJ』まで“特撮ヒーロー”を作り続けた。つまりこのペルソナ論と言うものは、“特撮ヒーロー”の系譜の中で描かれた思想の要となる部分を確実に持ち合わせていると考えられるのだ。これを踏まえ、“特撮ヒーロー”の系譜の中で形作られた思想を明確化する一助としたい。

1 “覆面や仮面で顔を隠す等の奇抜な格好をして、超人的な活躍を果たすヒーローを実際にあり得るかのように映し出そうとする実写映像作品”である。“特撮”とは一般的に“実写でありながら、特別な撮影方法によって、現実にはありえないようなものを実在するかのように映し出そうとする映像作品”のことであり、“特撮ヒーロー”とは、一般的には“覆面や仮面などで顔を隠し、奇抜な格好をして超人的な活躍を果たすヒーロー”とされる。

2 “仮面ライダーシリーズ”の制作年表としては以下の通りである。

『仮面ライダー』1971年4月3日～73年2月10日（全98話）

『仮面ライダーV3』1973年2月17日～74年2月9日（全52話）

『仮面ライダーX』1974年2月16日～10月12日（全35話）

『仮面ライダーアマゾン』1974年10月19日～1975年3月29日（全24話）

『仮面ライダーストロンガー』1975年4月5日～12月27日（全39話）

『仮面ライダー（スカイライダー）』1979年10月5日～1980年10月10日（全54話）

『仮面ライダースーパー1』1980年10月17日～1981年9月26日（全48話）

『仮面ライダーZX』1984年1月3日

『仮面ライダーBLACK』1987年10月4日～1988年10月9日（全51話）

『仮面ライダーBLACK RX』1988年10月23日から1989年9月24日（全47話）

『真・仮面ライダー/序章（プロローグ）』1992年2月20日（OVA）

『仮面ライダーZO』1993年4月17日公開

『仮面ライダーJ』1994年4月16日公開

（岡謙二、『不滅のヒーロー 仮面ライダー伝説』、pp198-215、ソニー・マガジズ）

ちなみに本論において『仮面ライダー』と呼んだ場合、平山亨プロデューサーおよび石ノ森章太郎のいずれかが関わっているものを示す。同時に『仮面ライダー』の設定を引き継いだ公式の二次創作は『仮面ライダー』の思想を作者が解釈をした資料として取り扱う。しかし『仮面ライダークウガ』（2000）から始まった“平成仮面ライダーシリーズ”は根本的思想が異なる可能性がある。このことは今後の課題として、ひとまず本論文では同名の別作品として取り扱う。同様に“平成仮面ライダーシリーズ”にて登場する『仮面ライダー』の登場人物は、あくまで“同名の別キャラクター”として取り扱う。

3（『神話と日本人の心』、岩波書店、p6）

4「モダン・ホラーの代表作家として名実ともに認められている作家」と訳者が評している。（ディーン・R・クーンツ著 大出健訳、『ベストセラー小説の書き方』、朝日文庫、p363）

5 同書が「制作方法を具体的に記述した本が世界的な成功を収めた」とされ、アメリカ国内のみならず世界各地の製作現場から上がっている」とされている。（ニール・D・ヒックス著 菊池淳子訳、『ハリウッド脚本術3 アクション・アドベンチャーを書く』、フィルムアート社、p158）

6（ニール・D・ヒックス、『ハリウッド脚本術』、pp21-22）

7（『神話と日本人の心』、p9）

8（『ハリウッド脚本術3 アクション・アドベンチャーを書く』、p145）

9（『ベストセラー小説の書き方』、pp79）

10（『広辞苑 第五版』、岩波書房 1999）

11（『ベストセラー小説の書き方』 pp27-30）

12 “観客が今までの経験からこういった要素が含まれているだろうと予測し、カテゴリー化したもの”と考えられる「ジャンルと言え、昔は一部限定された作品を指すものだった。（中略）ところが最近になってジャンルの意味は拡大し、その他さまざまな映画を指すようになり、しまいにはアクション・サスペンス・恋愛コメディなどというジャンルまで登場した。こんなごちゃまぜのジャンルができるのは、各ジャンルに万国共通の定義がないからだ。けれども観客はこれまでの経験から、あるジャンルの映画を見る時には、そのジャンル特有の要素を期待する。観客の期待を満足させられるかどうかは、脚本家が各ジ

ジャンルに特有の次のような要素を提供できるかにかかっている」(『ハリウッド脚本術 3 アクション・アドベンチャーを書く』、p16)

13 (同書、139)

14 (同書、pp80-81)

15 「アクション・シーンや冒険シーンで、ジークを道徳的なジレンマに陥らせて、彼の性格を浮き彫りにさせるほうが、長々と彼の経歴を書き連ねたり、重箱の隅をつつくように性格を列挙するよりはるかに生き生きとする」(『ベストセラー小説の書き方』、p206)

16 (同書、pp193-196)

17 (同書、p196)

18 (同書、p196-197)

19 (同書、p197-198)

20 (同書、p198)

21 (同書、p12)

22 (河合『神話と日本人の心』、p13)

23 (日高六郎訳、『自由からの逃走』、p5、東京草原社、2005)

24 (同書、p34)

25 「社会的にいっても、一つの階級から他の階級へ移るような機会はほとんどなく、一つの町や村から他の場所へ移るという地理的な移動さえ、ほとんど不可能であった。わずかの例外をのぞいて、生まれた土地に一生踏みとどまらなければならなかった。またときには、自分の好む衣装をつけることも、好きな食べ物を食べることもさへ自由ではなかった。職人はその製品を一定の価格で売らなければならず、百姓も町の市場という一定の場所で、売らなければならなかった。ギルドの成員は、他のギルドの成員に対し、生産の技術的秘訣を一切漏らすことを禁止され、同じギルドのメンバーにたいしては、原料を買うためのあらゆる便宜を提供しなければならなかった」

26 (同書、p52-54)

27 (同書、p42)

28 「生理的に条件付けられている要求だけが、人間性の強制的な部分ではない。ほかにも同じように強制的な部分があり、しかもそれは肉体的過程ではなく、生活様式と習慣の本質そのものに結びついている。すなわち、外界と関係を結ぼうとする要求、孤独を避けようとする要求がそれである。まったくの孤独で、他から引き離されていると感じることは、ちょうど肉体的な飢えが詩をもたらすのと同じように、精神的な破滅をもたらす。他人と関係を結ぶというのは、肉体的な接触をいうのではない。個人は何年間も肉体的にはひとりぼっちでいても、しかも理想や価値と、あるいはすくなくとも共同感と「帰属」感とを与える社会的な行動様式と、関係を結んでいるだろう。

29 (同書、p34)

30 「このように中世的社会機構が次第に解体した結果、近代的な個人が出現した。再びブルックハルトを引用すれば『イタリアにおいてまず最初に、(進行と幻想と子供じみた好みとから織られた) このベールが消えて言った。国家やその他この世の全てのことを、客観的に取り扱い、考察することが可能になった。同時に主観的な面も、それにつれて強調されるようになった。すなわち、人間は精神的な意味で個人となり、自分自身もそのように自覚した。(中略)』この新しい個人の精神について、ブルックハイトの述べるところは、前章でわれわれが第一次的絆から個人の脱出と呼んだことがらである。人間は、自己や他人を個人として分離した存在として発見する。また彼は自然を、二つの点で自分から分離しているものとして、すなわち理論的実的に征服する対象物として、また、その美しさを享樂すべき対象物として発見する」(同書、pp56-57)

31 「これまで述べてきた、経済的变化の著しい結果は、全ての人々に影響した。中世的社会組織は崩壊し、それとともに、中世的社会組織があたえていた、固定性と比較的な安定

性も破壊された。いまや資本主義の発達にともなう、社会の全ての階級が動きはじめた。経済的秩序の中には、もはや自然の、疑う余地がないと考えられるような、固定した場所は存在しなくなった。個人は独りぼっちにされた。全てはみずからの努力にかかっており、伝統的な地位の安定にかかっているのではない」(同書、p68)

³² (同書、p29)

³³ (同書、p40)

³⁴ (同書、pp98-99)

³⁵ “特撮ヒーロー”の放送年表は以下の通りである。『昭和特撮テレビ・映画史』を参考とし『月光仮面』以降を掲載している。年の為ヒーローが出ていないと判断される作品も掲載した。こちらで“特撮ヒーロー”と判断したものは太字にし、記述内容は参考文献に由来している。

【昭和 33 年 (1958 年)】

TV『月光仮面』(2月24日～59年7月5日、KRテレビ = 現・TBS系放送)

TV『遊星王子』(11月4日～59年9月30日、日本テレビ系放送)

映画『美女と液体人間』(6月24日、東宝系公開)

映画『大怪獣バラン』(10月14日、東宝系公開)

【昭和 34 年 (1959 年)】

TV『少年ジェット』(3月4日～60年9月28日、フジテレビ系放送)

TV『鉄腕アトム』(3月7日～60年5月28日、毎日放送、フジテレビ系放送)

TV『七色仮面(新七色仮面)』(6月3日～60年6月30日、日本教育テレビ=現・テレビ朝日系)

TV『豹の目』(7月12日～60年3月27日、KRテレビ=現・TBS系放送)

映画『宇宙大戦争』(12月26日、東宝系放送)

【昭和 35 年 (1960 年)】

TV『海底人 8823』(1月3日～6月28日、フジテレビ系放送)

TV『鉄人 28 号』(2月1日～4月25日、日本テレビ系放送)

TV『怪傑ハリマオ』(4月5日～61年6月27日、日本テレビ系放送)

TV『アラーの使者』(7月7日～12月27日、日本教育テレビ=現・テレビ朝日系放送)

TV『ピロンの秘密』(8月1日～61年4月29日、日本テレビ系放送)

TV『ナショナルキッド』(8月1日～61年4月29日、日本教育テレビ=現・テレビ朝日系放送)

TV『魔人ガロン』(パイロット版、未放送)

映画『電送人間』(4月10日、東宝系公開)

映画『ガス人間第一号』(12月11日、東宝系公開)

【昭和 36 年 (1961 年)】

TV『ふしぎな少年』(4月3日～9月29日、NHK放送)

映画『モスラ』(7月30日、東宝系放送)

【昭和 37 年 (1962 年)】

TV『隠密剣士』(10月7日～65年3月28日、TBS系放送)

映画『キングコング対ゴジラ』(8月11日、東宝系公開)

【昭和 38 年 (1963 年)】

TV『銀河少年隊』(4月7日～65年4月1日、NHK放送)

TV『伊賀の影丸』(7月24日、東映系公開)

映画『マタンゴ』(8月11日、東宝系放送)

【昭和 39 年 (1964 年)】

TV『忍者部隊 月光(新忍者部隊月光)』(1月3日～66年3月31日、7月3日～10月2日、フジテレビ系放送)

映画『モスラ対ゴジラ』(4月29日、東宝系公開)
 映画『宇宙大怪獣ドゴラ』(8月11日、東宝系公開)
 映画『三大怪獣 地球最大の決戦』(12月20日、東宝系公開)

【昭和40年(1965年)】

映画『フランケンシュタイン対地底怪獣』(8月8日、東宝系公開)
 映画『大怪獣ガメラ』(11月27日、大映系公開)
 映画『怪獣大戦争』(12月19日、東宝系公開)

【昭和41年(1966年)】

TV『ウルトラQ』(1月2日～7月3日、TBS系放送)
 TV『丸出だめ夫』(3月7日～68年2月26日、日本テレビ系放送)
 TV『マグマ大使』(7月4日～67年4月9日、フジテレビ系放送)
 TV『ウルトラマン』(7月17日～67年4月9日、TBS系放送)
 TV『悪魔くん』(10月6日～67年3月30日、NET=現・テレビ朝日系放送)
 TV『怪獣ブースカ』(11月9日～67年9月27日、NTV系放送)
 映画『大魔神』(4月17日、大映系公開)
 映画『大忍術映画ワタリ』(7月21日、東映系公開)
 映画『フランケンシュタインの怪獣 サンダとライガ』(7月31日、東宝系公開)
 映画『大魔人怒る』(8月13日、大映系公開)
 映画『大魔神逆襲』(12月10日、大映系公開)
 映画『ゴジラ・エビラ・モスラ 南海の大決戦』(12月17日、東宝系公開)
 映画『怪獣大決戦』(12月21日、東宝系公開)

【昭和42年(1967年)】

TV『仮面の忍者 赤影』(4月5日～68年3月27日、関西テレビ、フジテレビ系放送)
 TV『キャプテンウルトラ』(4月16日～68年3月27日、TBS系放送)
 TV『光速エスパー』(8月1日～68年1月23日、日本テレビ系放送)
 TV『忍者ハットリ君+忍者怪獣ジッポウ』(8月3日～68年1月25日、NET=現・テレビ朝日系放送)
 TV『ウルトラセブン』(10月1日～68年9月8日、TBS系放送)
 TV『怪獣王子』(10月2日～68年3月25日、フジテレビ系放送)
 TV『ジャイアント・ロボ』(10月11日～68年4月1日、NET=現テレビ朝日系)
 TV『^{ジャガー}豹マン』(パイロット版、未放送)
 TV『^{ひょう}豹マン』(パイロット版、未放送)
 映画『大怪獣空中戦 ガメラ対ギャオス』(3月15日、大映系放送)
 映画『宇宙大怪獣ギララ』(3月25日、松竹系公開)
 映画『大巨獣ガッパ』(4月22日、日活系公開)
 映画『キングコングの逆襲』(7月22日、東宝系放送)
 映画『怪獣島の決戦 ゴジラの息子』(12月16日、東宝系放送)

【昭和43年(1968年)】

TV『アゴン』(1月2日～1月5日、フジテレビ系放送)
 TV『マイティジャック』(4月6日～12月28日、フジテレビ系放送)
 TV『戦え! マイティジャック』(7月6日～12月28日、フジテレビ系放送)
 TV『怪奇大作戦』(9月15日～69年3月9日、TBS系放送)
 TV『バンパイヤ』(10月3日～69年3月29日、フジテレビ系放送)
 TV『河童の三平 妖怪大作戦』(10月4日～69年3月28日、NET=現・テレビ朝日系)
 映画『ガメラ対宇宙怪獣バイラス』(3月20日、大映系公開)
 映画『妖怪百物語』(3月20日、大映系公開)
 映画『怪獣総進撃』(8月1日、東宝系公開)

映画『妖怪大戦争』(12月19日、東映系公開)

映画『ガンマー第三号 宇宙大作戦』(12月19日、東映系公開)

【昭和44年(1969年)】

TV『魔人バンダー』(1月5日～3月30日、フジテレビ系放送)

TV『妖術武芸帳』(3月16日～6月8日、TBS系放送)

映画『ガメラ対大悪獣ギロン』(3月21日、大映系公開)

映画『東海道お化け道中』(3月21日、大映系公開)

映画『ゴジラ・ミニラ・ガバラ オール怪獣大進撃』(12月20日、東宝系公開)

【昭和45年(1970年)】

TV『ジャングルプリンセス』(7月6日～8月10日、日本テレビ系放送)

映画『ガメラ対大怪獣ジャイガー』(3月21日、大映系公開)

映画『幽霊屋敷の恐怖 血を吸う人形』(7月4日、東宝系公開)

映画『ゲゾラ・ガニメ・カニバ 決戦! 南海の大怪獣』(8月1日、東宝系公開)

【昭和46年(1971年)】

TV『スペクトルマン』(1月2日～72年3月25日、フジテレビ系)

TV『仮面ライダー』(4月3日～73年2月10日、毎日放送、NET=現・テレビ朝日系)

(『ぼくらが大好きだった特撮ヒーローBEST マガジン』、p253-256、講談社、2009)

³⁶ (『ぼくらが大好きだった特撮ヒーローBEST マガジン』、p236、講談社、2009)

³⁷ (島田裕巳、『映画宝島 怪獣学・入門!』、p154)

³⁸ 「科特隊は”怪事件や異変を専門的に捜査し、宇宙からのあらゆる侵略から地球を防衛する”というミッション(組織目的)を持つ1つのチームである」(奥村哲史、『若手学者 25人がまじめ分析 ウルトラマン研究序説』、p18、中経出版)

³⁹ 正式名称は「ビートル」

⁴⁰ 「人生のある時点にくると、急に”地表”という観念ができあがってしまう。(中略)例えば、地表＝地面ということを知覚する子供たちは、地面の下に知覚やマグマがあることを教えられ。で、その下に知覚やマグマがあることを教えられ。で、そのマグマの”下”は、となるとまた近くがきて地面に出る。なぜなら私たちの住んでいるのは”地球”という名の球体であり、その”球体”の上にいるということは、その”下”をたずねても、また地球の反対側に出てしまうということになるからである。(省略)これはいわゆる”科学的な見方”である」(『映画宝島 怪獣学・入門!』、p135)

⁴¹ (同書、pp136-137)

⁴² 『児童文学とはどこまで闇を描けるか』、p39、JICC 出版局)

⁴³ 『ウルトラマン研究序説』、p18

⁴⁴ 隊員たちの個性に関する記述においても参考としたのは原田実の『ウルトラマン幻想譜』(pp69-81)である。

⁴⁵ 「集権化」は隊員一人に権力が集中しすぎること、「分散化」は権力が分散しすぎて体系がバラバラになってしまうことを示していると考えられる。

⁴⁶ (『ウルトラマン研究序説』、p18)

⁴⁷ 「ナチス親衛隊、ルーマニアのチャウシャスク政権下の治安警察部隊、文化革命当時の紅衛兵、日本での連合軍、米国の人民寺院——など過去の歴史をひもとけば、特定の対象(人物あるいは思想の場合に多い)に異様な忠誠心を示す組織の存在が多く報告されている」(同書、p34)

⁴⁸ (『ウルトラマン研究序説』、p28)

⁴⁹ (『ウルトラマン幻想譜』、p87-88)

⁵⁰ (同書、p140)

⁵¹ (諫山陽太郎、『マンガ・特撮ヒーローの倫理学』、p53、鳥影社)

⁵² 「シリーズの世界観、登場人物の基本設定などを構築し、中心的エピソードのシナリオ

を執筆する役割のことを「メイン・ライター」と呼ぶが、金城の場合はそれだけではなく、他の作家の書いたシナリオも全部チェックし、シリーズ全体の流れを総監督する、プロデューサーのような存在でもあった。

だから、〈ウルトラマン〉の生みの親は誰か？ ということになる、まず金城哲夫の名が挙げられるのだ」（切通理作、『怪獣使いと少年』p36）

⁵³（切通理作、『怪獣使いと少年』pp130-131）

⁵⁴（同書、pp128-129）

⁵⁵（同書、p78-79）

⁵⁶「ダンは、ハヤタのようなウルトラマンの容れ物ではない。地球人のふりをしているウルトラセブン自身なのだ。しかし、そのことでダンにはハヤタにはなかった内面が生じてしまった。そして『ウルトラセブン』は、二つの世界の間に引き裂かれた一人の人間に、その存在理由を問いかけていくドラマになっていった」（同書、p81）

⁵⁷『『宇宙人 303』というエピソードは、コスモポリタスの第八惑星・キュラソから脱走し、地球とキュラソ星の合同調査で追い詰めていくと言うものだ。キュラソ星からの報告によると 303 は「凶悪なる殺人犯」ということだが、彼がなぜ殺人を犯さなければならなかったのか、一切説明はされない。（中略）どう考えても、303 号は地球とキュラソ星の友好のために捨石に利用されたと思えないのだが、ウルトラセブンことモロボシ・ダンは、炎上する 303 号を見上げ、やはり自分の言い聞かせるように語り掛ける。

「広い宇宙でも、もう君の逃げ場はないのだ、キュラソ星人。だがそれは自業自得と言うべきだ。宇宙でもこの地球でも、正義はひとつなんだ！」

アメリカが、どこの国でも「正義はひとつ」という奢りからベトナム戦争に参加したことからも、ここに込められているものが何であるかは察しがつく」（同書、pp88-89）

⁵⁸ 一般的な“原作者”とは“既に自身の作品を作っていて、その作品を他の作者に別の制作形式で再構築される”役割である。例えば、“既に漫画作品として『仮面ライダー』を作っていて、それを基にテレビ作品が作られた”というのなら、一般的な“原作者”である。しかし『仮面ライダー』の場合はそうではない。簡単な流れとしては次の通りである。

（1）毎日放送で子ども番組の企画が持ち上がる。

（2）プロデューサーの平山亨が「脚本家の伊上勝、上原正三、市川森一の三氏を集め、新しいヒーロー像の想像にチャレンジすることになった」。

（3）「原作の相談にも乗ってくれるような漫画家は、（中略）石ノ森章太郎を使おうということになった」

（4）企画書①『マスクマン K』が提出される。

（5）企画書②『仮面天使』が提出される。

（6）企画書③『クロスファイアー』が提出され、石ノ森章太郎もデザイン画を作る。

（7）石ノ森章太郎がクロスファイアーのデザイン画が気に入らないと連絡が入り、新しく『スカルマン』というデザインが提出される。

（8）『スカルマン』は仮面の形が「髑髏」の形をしており、演技が悪い・スポンサー受けが悪いということから、「骸骨」以外の仮面を求められる。

（9）骸骨に似た顔の形状をしていたことで飛蝗をモチーフとした“仮面ライダー”像が出来上がる。

ちなみに石ノ森が“原作者”とされるのは、漫画版『仮面ライダー』を、“原作漫画”として発表した為である。

（池田憲章・高橋信之、『ウルトラマン対仮面ライダー』、pp24-27、文藝春秋）

⁵⁹（池田憲章・高橋信之、『ウルトラマン対仮面ライダー』、p276、文藝春秋）

⁶⁰（池田憲章・高橋信之、『ウルトラマン対仮面ライダー』、pp35-36、文藝春秋）

⁶¹ 例えば、作戦内容の一部としては以下の通りである。

（第 5 話）核爆弾を地下で爆発させ、大地震を起こす「人工地震作戦」を計画。そのため

に本郷の幼馴染・雨宮ちか子を誘拐し、地震の専門家である彼女を操って協力させた。

(第12話) 白川博士が発明した殺人光線デンジャーライトを悪用して飛行機を撃破し、世界の制空権を握ろうと画策した。

(第14話) ライダーの抹殺と、「メキシコの花」と呼ばれる爆弾で佐久間ダムを破壊し、日本を混乱させる「Z作戦」が使命。

(『Kodansha Official File Magazine 仮面ライダー Vol.1』、pp22-23、講談社)

⁶² ここでは便宜的に“本郷猛”で通したが、“本郷猛”とは“仮面ライダー1号”に変身する人物の名前である。それ以外、2号が主人公である場合は“一文字隼人”、V3の場合は“風見志郎”がほぼ同じ役割を担う。本論文では基本的に“本郷猛”に統一するが、『仮面ライダーシリーズ』の物語の内容は大体同じ構成となる。

⁶³ (第二話『恐怖蝙蝠男』、DVD『仮面ライダー』、東映)

⁶⁴ (第三話『怪人さそり男』、DVD『仮面ライダー』Vol.1、東映)

⁶⁵ (第四話『人食いサラセニアン』、DVD『仮面ライダー』Vol.1、東映)

⁶⁶ (第四話『人食いサラセニアン』、DVD『仮面ライダー』Vol.1、東映)

⁶⁷ 第一話では「城北大学」という名称なのだが、それ以降「城南大学」に統一される。

⁶⁸ 彼を演じた“小林昭二”は『ウルトラマン』において“ムラマツ”を演じている。前述の通り、彼は“科学特捜隊”における“擬制的父”でもあった。このことから『ウルトラマン』の世界観との関連性も多少伺える

⁶⁹ 「家族の登場しない孤独なファイターである本郷猛仮面ライダーにとって唯一心を明かして語り合える存在で、正義側の組織が現れなかった『仮面ライダー』においてこの厚い心で結び合う本郷一立花一滝の“男たちの構図”は独特だった。

(中略)

歴代ライダーの“親父”さんを演じ続けられたのも、小林氏の重厚な演技にこめられたライダーの悲しみを見つめる立花の思いがあったからなのである」(赤星、『ウルトラマン対仮ライダー』、p201、文藝春秋)

⁷⁰ (第一五話『逆襲! サボテグロン』、DVD『仮面ライダー』Vol.3、東映)

⁷¹ そのことを示すように首領は、シリーズの決定打と評される『仮面ライダーV3』の最終回において自身を「私は、全人類に死を与える、死神なのだ」と語っている。また、関連することとして、岡田は“世界征服”を「全世界の国家を自分たちの管理下に置く」という意味で考えた場合、「ショッカーが、後に支配するはずの国家や共同体を破壊する行為は不可解である」としている。(岡田斗司夫、『「世界征服」は可能か?』、p24-25、ちくまプリマー新書)だが“ショッカー”の目的が、国家の支配ではなく、個人を排除し、共同体をいずれ破滅させることを第一としているのならば説明はつく。

⁷² (岡謙二、『不滅のヒーロー 仮面ライダー伝説』、p276-277、ソニー・マガジズ)

⁷³ (岡謙二、『不滅のヒーロー 仮面ライダー伝説』、p277-278、ソニー・マガジズ)

⁷⁴ 具体的記述としては、「仮面ライダーの歌」に「正義のマスク」というものがある。これは『仮面ライダー』の第1-71話までエンディングテーマとして使われていたものだが、この記述から仮面に“正義”というものが付随しているのが分かる。またそれ以外にも、第四話『怪人サラセニアン』の劇中にて“仮面ライダー”に助けられた少年ケンジが“本郷猛”と次のような対話をしている。

ケンジ「あれえ、仮面ライダーとおんなじだあ」

本郷猛「えっ、何が？」

ケンジ「ライダーも、お兄ちゃんと同じに頭を撫でてくれたよ」

本郷猛「ははっ、お兄ちゃんはね、仮面ライダーみたいな強いお兄ちゃんじゃないんだよ」

このことから、“本郷猛”は“仮面ライダー”と“同一人物”でありながら、“仮面ライダー”を自分より強い“別の存在”として語っていることが分かる。もちろん、ケンジに

自分が“仮面ライダー”であるという正体を知られない為の方便という見方は出来る。しかし、それにしても「自分は“仮面ライダー”とは違う」と言えただけで、自身より強いものとして語る必要性はないはずだ。やはりここでも、“仮面ライダー”はただ“本郷猛が正体を隠したもの”ではなく、もっと“別の存在”として描かれていることが分かる。⁷⁵“仮面ライダー”のヒーロー像が決まる前、「仮面というものを使って変身するヒーロー」であるということは決まっていた頃の段階である。

⁷⁶ (岡謙二、『不滅のヒーロー 仮面ライダー伝説』、p18、ソニー・マガジズ)

⁷⁷ (池田憲章・高橋信之、『ウルトラマン対仮面ライダー』、p23、文藝春秋)

⁷⁸ (岡謙二、『不滅のヒーロー 仮面ライダー伝説』、p278-279、ソニー・マガジズ)

⁷⁹ ちなみに石ノ森章太郎の漫画版『仮面ライダー』において“仮面ライダー”は自身を“大自然の使者”と発言している。これは仮面ライダーが“バッタ”の仮面をしていることによる。だがもともと、“仮面ライダー”の企画者たちは、髑髏の仮面が最適だと考えていた。しかしスポンサーから苦情が来ることを恐れて別案を出されたことで、図鑑を見て髑髏に似た形のものを探した結果、バッタの顔が選ばれたと言う。(平山亨、『仮面ライダー名人列伝』、pp22-34)。また、仮面ライダーは風力エネルギーで動くという設定であるが、「石ノ森章太郎のヒーロー像は、主人公の孤独感を出す為に風が吹いている描写が多い」と指摘されており、本人も認めている(石ノ森章太郎・池田憲章対談、『ウルトラマン対仮面ライダー』、p271-272)。また、TV版『仮面ライダー』において「大自然の使者」という発言はしていない。このことから、『仮面ライダー』の“仮面”は“大自然”といったものよりも、人間、あるいは“個人”を示したものと考えられる。

ちなみに、ショッカーの“怪人”が動物や昆虫を模した形をしているのは、“仮面ライダー”がバッタということから派生し、昆虫だけでは様々なバリエーションは作れないということで、動物から選ぶようになったと、石ノ森は話している(石ノ森章太郎・池田憲章対談、『ウルトラマン対仮面ライダー』、p273)。

⁸⁰ (和智正喜、マガジン・ノベルス・スペシャル『仮面ライダー……誕生 1971……』、pp198-200、講談社)

⁸¹ このことに関連して『仮面ライダーV3』にて、V3に変身する青年“風見志郎”役を演じた“宮内洋”が“ヒーロー”というものについて、次のように語っている。

「職業は関係ありません。例えば、サラリーマンであろうと、看護婦さんであろうと、自分が今置かれている現場の中で精進するのが一番。ヒーローというものは、カッコいい変身ものではなくて、人間ヒーロー。あなた自身のヒーローなんだと。心に思い続けて、自分で持っているポリシーのヒーローというものを、結婚して、お子さんができて、自分の子どもにも、人様の子どもにもいろんな部分で持って会話できますかということ。堂々といえますかということです。特撮云々を通じてではありますが、人間ヒーローを謳っているんです」(宮内洋、『スーパーヒーロー作戦 完全攻略ガイド』、p143、メディアワークス、主婦の友社) このことから、宮内が“特撮ヒーロー”を通して表現しているのが、自身の役割に応じて懸命に励む人間であることが分かる。これもまた、“仮面ライダー”によって表現しようとしたヒーロー像の証言として考えることができるだろう。

⁸² (村枝賢一、『仮面ライダーSPIRITS 1』、p30-31、2001、講談社)

⁸³ (池田憲章・高橋信之、『ウルトラマン対仮面ライダー』、p61、文藝春秋)

⁸⁴ ちなみにこれは劇中においても、吸血鬼となった状況で、“滝和也”を助けようとする描写があり、スパイクが“ショッカー”の“改造人間”となった状況でも自分の役割に応じて戦おうとしたことを示しているのだろう。ちなみにTV版『仮面ライダー』においても、第16,17話で登場する“ピラサザウルス”という“怪人”が、“人間”に戻るという描写がある。もともと“ピラサザウルス”にされたプロレスラー“クサカノボル”は、弟“キヨシ”の為にチャンピオンを目指していた。“クサカノボル”は“キヨシ”との家族の“絆”を消されて怪人と化すが、チャンピオンになるという目的は、怪人にされた後もずっとと言

い続けている。言い換えるならば、記憶を失ってもキヨシとの絆から生まれたチャンピオンになるという目的だけは忘れていなかったということだ。同時に、弟“キヨシ”は最後まで兄のことを気遣っていた。そして、“ピラザサウルス”が“仮面ライダー”に倒されたことで、“ピラザサウルス”は“クサカノボル”に戻る。これは“他者を排除してもチャンピオンになろうとする執念”によって“怪人”にされた人が、“ショッカーを知らながら、兄弟の物語を信じ、取り戻そうとした弟の想い”によって取り戻されたと解釈できる。

⁸⁵ 同様にマガジン・ノベルスペシャルの『仮面ライダー1971 誕生』にも、「ショッカーが滅んだとしても別の組織が成り代わる」(pp126-128,p197)という発言がある。

⁸⁶ (平山亨、『仮面ライダー名人列伝』、p64、風塵社)

⁸⁷ (平山亨、『仮面ライダー名人列伝』、p208-211、風塵社)